

# ユートピアの途 — 抄本

M.ブーバー著 (1950年) 長谷川 進訳

理想社 初版 1969(昭和 44)年 (改訳第 2 版 1983(昭和 58)年)

## 目次

1 概念——(社会の構造的更新の理念) .....	1
2. 事実——(社会主義におけるユートピア的要素) .....	2
3. 先駆者たち .....	7
4. プルードン .....	10
5. クロポトキン .....	15
6. ランダウアー .....	19
7. 実験 .....	25
8. マルクスと社会の更新 .....	33
9. レーニンと社会の更新 .....	38
10. もう一つの実験 .....	48
11. 世界危機のさ中で .....	54
訳注 .....	61

マルティン・ブーバー (ヘブライ語: מרטין בובר, ラテン文字転写; Martin Buber, 1878年2月8日 - 1965年6月13日) はオーストリア出身のユダヤ系宗教哲学者、社会学者。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

二十一世紀は、二十世紀以上に先端科学兵器による戦争で開幕した。世界中の人々は、二十一世紀を“平和の世紀に”とあれほど期待したのに。

このような時に、ハイデッカーに並んで二十世紀最高の哲学者とされるユダヤ人哲学者 M・ブーバーの遺した言葉は、近代人への愛と平和の具現を期待させるメッセージを私たちに与えてくれるものと信じる。(聖路加国際病院理事長 日野原重明)

出典: 『ブーバーに学ぶ』 斉藤啓一 日本教文社 2003(平成 15)年 「推薦の言葉」

注) 引用文の傍点は執筆者(訳者)による。

注) 引用文中の()は執筆者(訳者)による。[]は抄本の作成者による補足である。

抄本作成 2021(令和3)年8月 和智章宏

版 1.0	2021年8月14日	初版
版 1.1	2021年8月31日	一部引用文修正、段修正、誤字・脱字、揺らぎ(カタカナ)修正
版 1.2	2021年9月8日	誤字・脱字修正
版 1.3	2021年10月31日	誤字・脱字修正
版 1.4	2022年8月20日	訳注追加、段修正、一部引用文修正、一部注釈削除、誤字・脱字修正

## 1 概念——(社会の構造的更新の理念)

かくして『[共産党]宣言』の「空想主義」に対する論争の章は、最も正確な意味での内部的な政略行動を意味するものであり、すなわちマルクスがエンゲルスを味方にして、まず第一に、「正義者同盟」自体における他の、みずから共産主義を称し、あるいは他からそうよばれた諸流派に対して行った闘争が、勝ち誇る結末を見たことを意味するものである。「空想的」という概念こそは、この闘争で発射した最も鋭い仕留めの矢であったのだ。 p.7

もともとマルクスやエンゲルスが「空想家」とよんだのは、その考えが工業の決定的発達、プロレタリアートおよび階級闘争に先んじており、したがってこうしたものを考慮に入れることができなかつた人たちであったのだ。それが後になるとこの言葉がマルクス及びエンゲルスから見て、工業の発達を考慮に入れなかつたとするすべての人たちにたいして無差別に浴びせかけられたのである。 p.12

それ以来「空想家」という貼札は、非マルクスの社会主義に対するマルクス主義の闘いにおいて最も有力な武器となった。もはや相手の見解にたいして自己の見解の正しさをその都度立証することなど問題ではなくなった。人びとは一瞬に自己の立場に根本的かつ排他的に科学と真理を見出し、相手の立場には一概に空想主義と迷妄とを見出した。今日では「空想家」であることは、現在の経済的発達に立ちおくれることであり、その現在の経済的発達がいかなるものであるかは、もちろんマルクス主義が教えるのである。 p12 - p.13

そうした人たちは先駆者としてのユートピストであったが、そうした人たちのありうることを考慮しない人々は、妨害者としてのユートピストである。前者は科学に道を開いたが、後者は科学への道をふさいでいる。だが全く好都合なことには、前者を片づけるには、ただユートピストという烙印を押せば十分なのである。 p.13 - p.14

「私たちが自分の力をまだためして見ないことを空想的と呼ぶのはなんの益もない。」[ブーバー] p.14

しかし社会主義が迷いこんでしまった袋小路から抜け出るためには、何よりも「ユートピア的」という合言葉をその真の意味内容について吟味しなければならない。 p.14

## 2. 事実——(社会主義におけるユートピア的要素)

その幻想は、ふらふらさまよっているものでもなければ、変わり易い感興のままにあてどなくゆり動いているものでもない。それは第一義的かつ本源的なあるものに構造的にしっかりと中心をおき、これを建設することをもって自らの課題とすべきところのものであって、この第一義的なものとは願望である。ユートピア的像は「あるべき」ところのものについての像であり、こうした像を描くものはそれが存在することを願望するものなのである。 p.15

精神史上における像形成のユートピア的願望は、すべての像形成のように、よしそれが心の奥底に根ざしているにしても、衝動的な何ものでもなければ、自己満足的な何ものでもない。この願望は、魂と親しく通じながらもそれに制約されはしない超人間的なあるものと結合している。そこに働いているのは、宗教的または哲学的想念において、啓示または理念として体験され、そして本質上、個々人のうちではなく、人間的共同社会(共同体)自体のうちにおいてのみ実現されうるところの、かの正しきものへの渴望なのである。 p.15 - p.16

存在すべきものについての想念は、時には個人の意志から全く独立しているかのように見えるけれども、人間世界の現状に対する批判的な根本の関係からひき離されることはできない。不条理な秩序について抱く苦悩が下地となって、こうした想念を魂に生み、魂がこの想念から受けとるものが、倒錯した物事の背理にたいする洞察を強めかつ深める。想念されたものの実現への渴望こそは、かのユートピア像を形成するのである。 p.16

啓示における正しきものへの想念は完成した時間の像のうちに、すなわち救世主的結末論として完成する。理念における正しきものへの想念は、完成した空間の像のうちに、すなわちユートピアとして完成する。前者は本質上社会的なものを越えて被造物的な、それどころか宇宙的なものに接する。後者は、時としてその像のうちに人間の内面的変革を含むにしても、本質上社会の範囲に限られている。終末論は創造の完成を意味し、ユートピアは、人々の共同生活のうちに宿る「正しい」秩序の可能性の展開を意味する。 p.16

終末論にとっては(中略)決定的な働きは天上(神)から生起する。ユートピアにとっては、すべてが自覚せる人間意志によって支配される。それどころか、まさしくユートピアは、あたかも自覚せる人間意志以外のいかなる要因もそこには存在しないかのように考えられる社会像として特徴づけられることができる。 p.17

そして概念としては不可能とも見えるものが、ユートピア像としては信念の力を鼓舞し、目的と計画とを定める。そうしたことが行われるのは、それが現実の深みに潜む諸々の力に結びついているからである。終末論は預言者的である限り、ユートピアは哲学的である限り、現実主義的な性格をもつのである。 p.17

啓蒙時代とそれにつづいて起こった出来事は、宗教的終末論からその活動領域をいよいよ多く奪い去った。十世代のうちに、将来のある時点において天上からの働きが人間を救済し、不調和なものから調和のあるものに変えるであろうと信ずることは、人間にとってますます困難となった。 p.17

汎技術的な精神的傾向の影響の下に、ユートピアもまたしばしば全く技術的なものとなった。古くからユートピアの基礎をなしてきた自覚的な人間意志も、いまは技術的なものとして理解され、社会も自然と同様に技術的計算と技術的構成によって克服されるべきである。しかるにいまや社会は、そのもろもろの矛盾において避けることのできない問題として人間の前に立ちあらわれてきた。 p.18

しかしここ[ユートピア]では社会的思考は技術的思考にたいして優越した地位を示している。 p.18

完全な社会構成の見取り図を提供しようと企てるユートピアは体系に変じている。しかしこの「ユートピア的」社会体系のなかに、追いのけられた救世主義のすべての力がはいるこんでいる。近代の社会主義および共産主義の社会体系は、終末論と同様に告知ないし呼びかけの性格を帯びている。(中略)近代の社会体系とともに はじめて教説と行動、計画と実験の緊密な関係が結ばれた。 p.18 – p.19

終末論には、さきにもほのめかしたように、二つの基本的形態が存在するのである。 p.20

- 呼びかけられた一人一人の人間の決断力に、あらゆる瞬間にまた確定すべくもない度合いにおいて贖罪を用意させるところの預言者の形態 [イスラエルに由来]
- 贖罪の過程がその瞬間および経過のあらゆる詳細にわたって太古から決定されており、よし不動に確定されている事柄が人間にあらかじめ「打ち明けられ」啓示されるにしても、人間はそれを成就するためにただ道具として用いられるにとどまり、人びとにそれぞれの職能が指示されているところの黙示録的形態 [イランに由来]

すなわち預言者の基本形態は所謂ユートピストの体系のいくつかのうちに、黙示録的基本形態はとりわけマルクス主義のうちに。 p.20

いわゆるユートピストたちのユートピアは革命前的であり、マルクス主義者のユートピアは革命後的である。 p.21

「国家の死滅」とか、「必然の国から自由の国への人類の飛躍」とかは、なるほど[ヘーゲルの]弁証法的には根拠づけられるかもしれないが、科学的にはもはや根拠づけられはしない。 p.21

マルクス主義的思想家パウル・ティリッヒがいうように、「与えられた現実からはどのようにしても理解できないし」、「現実と期待との間には深淵が横たわっており」、「この理由でマルクス主義は、そのユートピアへの敵意にもかかわらず、それ自身の隠されたユートピア信仰にたいする疑いを決して払いのけることはできなかった。」 p.21

われわれは、マルクス主義からの批判が非マルクス主義の社会的教説におけるユートピア的要素として指摘するものを検討するとき、(中略)明らかにちがった二つの要素が区別されなければならない。 p.22

- ◆ 図式的虚構： とくにフーリエにおいて出会う
  - ・ 人間の本質とその能力および欲求についての理論から、あらゆる能力を活用し、あらゆる欲求を満たすべき社会秩序をひきだすところの、多少抽象的な想像力から発している。
  - ・ 社会秩序の領域に入るやいなやあらゆる観察が非現実的な、信頼しがたいものとなる。
  - ・ 問題が、人びとの生活における問題から衝動的自動機械の存在過程における見せかけの問題に、同一の機械的配列から起こる以上、同一の解決を許すところの見せかけの問題に変えられている。⇒ フーリエ自身いつているように「すべての問題が同一の解決」をえている。
- ◆ 有機的計画： 上の図式的虚構とは全く異なる p.23
  - ・ われわれの社会秩序の本質を構成するもろもろの矛盾を克服するため、現在の人間と現在の事態とについてのとらわれない、非独断的な認識から出発して、これらの両者の変改を開始しようという意図が働いている。
  - ・ この精神的傾向は、無条件に現在の社会状況の事実に出発点を取りながら、いかなる独断的気まぐれにも惑わされない透徹した眼をもって、まさしくかの改変を目指すところの、現実の深みのうちにいまもかくされ、他の顕著な力強い傾向によってなお不分明にされている諸々の傾向に着目するのである。
  - ・ あらゆる計画的な知性は積極的な意味においてユートピア的であると正当にも言われた。
  - ・ ここでの社会主義的「ユートピスト」の計画的知性は、あらゆる時代に認めることのできるもろもろの発展傾向の多様性、その相反性をも逐一知り、あるいは少なくともそれに気づくことにおいて、現に支配的な諸傾向を洞察しながらそれらにかくされた他の諸傾向を見落とすことなく、まさにそれらの傾向こそは現存社会の矛盾を真に克服するであろうような秩序を目標しているかどうか、またどの範囲にまでそうであるかを問うことにおいて、まさしくその積極的ユートピア主義を確証しているのである。 p.23

いわゆるユートピア社会主義が発展して行くうちに、その指導的な代表者たちの間には、社会的問題の立て方にしてもその解決にしても、一つの公分母に還元され得ないこと、あらゆる単純化が、精神的には極めて意味のあるものでも、認識と行動とに共に不利な影響を与えるという確信がいよいよ強くなった。 p.24

しかしまさしくここに、一方の、将来いつか革命が最終的勝利を取めたのち、誰にもわからぬ遠い先に成就される変化と、革命にいたるまでまた革命をつうじてとられる手段、いかなる特殊の見解いかなる特殊の発意をも容赦しない完全な中央集権主義を特徴とする手段との間には、かの特殊なマルクス主義的ウトピーク[ユートピア]によってのみ架橋することのできる深淵がうち開いているのである。 p.25

これにたいして「ユートピア的」な非マルクス主義的社会主義は、目標と同じ性質の手段をとろうとする。それは、将来の「飛躍」を当てにして、追及することとは逆のことを準備しなければならないと信ずることを拒否する。それはむしろ、追及する事柄にとっていまここで現在可能な場所をつくりだし、かく

してそれがのちに実現されるようにしなければならないと信ずる。 p.25 - p.26

それは革命後の飛躍を信ぜず、革命的連続を、もっと正確に言えば、革命とはその内部で既に可能な限度にまで発展している現実の成熟、解放および拡大を意味するにすぎないような連続を信ずるのである。  
p.26

われわれは、社会主義が発生した資本主義社会をその社会として性格を検討するとき、それが構造的に貧困な、しかもいよいよ貧困になりつつある社会であることを知る。 p.26

社会の構造とは社会の内容、共同体的な内容の意味に理解すべきである。社会は、真の諸社会、すなわち地域のおよび仕事の共同体とその順次的連合から構成される度合いに応じて、構造的に豊かであるといふことができる。 p.26

このような社会の構造では、それをどの個所でしらべようとも、われわれはいたるところに「社会」という細胞組織、すなわち生きた協力の存在、広範囲に自律的な、内面から自己を形成し変形して行く人びとの共同生活を見出すのである。社会はまさにその本質からして分離せる個々人からではなく、結合単位とそれら単位の連合とからなるのである。 p.26

このような社会の本質は、資本主義経済とその国家との強圧によってますます空洞化され、かくして近代の個人化の過程は原子化の過程として完成した。それと共に、古くからの有機的諸形態の多くは、外面的には存在を保ちながらも、意義と精神においては空虚となり、衰頽してゆく組織となった。たんに人々が大衆とよびなれているものだけでなく、社会全体が本質的に無定形、無分節であり、構造的に貧困なのである。 p.26 - p.27

これにたいしては、経済的または、精神的関心の合致から生まれるもろもろの団結、その最も有力なのは政党であるが、これらとても助けにならない。これらの団結における人々の交渉は、もはや生きたものではなく、人々がそこに求める、失われた共同体的な形態を補うべきものとしては、何一つ見出しえないからである。 p.27

「社会」をしてそれ自体一つの矛盾たらしめるこのような状態に直面して、「ユートピア」社会主義者たちは、いよいよもって、社会の構造的更新を追求した。——それは、マルクス主義的批判者たちが考えるように、片のついた発達段階を復活しようというようなロマンチックな企てとしてではなく、むしろあらゆる経済的および社会的生成の深みに認められる分散主義的な反対傾向と結びつき、また人間精神の内奥に、徐々に成長しつつある最も内面的な反抗、大衆化的もしくは集団化的孤独にたいする反抗とも結びついてのことなのである。 p.27

ヴィクトル・ユーゴーはユートピアを「明日の真理」と呼んだ。ユートピア的社会主義と呼ばれ、一見時代おくれなもののように宣伝された精神の努力こそは、おそらく将来の社会構造を準備するであろう。

——それ自体として必然的な、人間決意の力から独立した歴史過程などは存在しない。 p.27 – p.28

「ユートピア」社会主義こそは、社会の構造的更新の埒内で、時々可能な最大限の共同社会的自治を獲得するために闘うのである。 p.28

「人間対人間の現実の生活が少ししか変わらないところでは、社会主義の虚偽な実現が存在しうるにすぎない。人間対人間の現実の共同生活は、人々がその共同生活に関する実際の物事とともに経験し、協議し、管理するところ、現実の近隣関係、現実の作業組合が存在するところでのみ、発展することができる。われわれはおそらくロシアにおける実現の企てから、人びとの関係は、それが個人の生活および自然的社会集団の生活を規制する社会主義的中央集権主義的権力秩序のなかにはめこまれるときには、本質的に変わらないままであることを知るであろう。もちろんわれわれは原始的農業共産制やキリスト教中世の身分制国家に逆戻りすることはできないし、また、それを欲するものでもない。われわれは全く非ロマンチックに、全く現在に生きながら、われわれの歴史的時代の反抗的な材料をもって真の共同社会を建設しなければならない。」 [1928 ブーバー] p.28 – p.29

### 3. 先駆者たち

「ユートピア」社会主義の歴史には、それぞれ特殊の仕方でも代代的に結びつく、活動的な思想家の三つの対がきわ立っている。サン・シモンとフーリエ、オウエンとプルドン、クロボトキンとランダウアーである。 p.30

#### サン・シモン

本質的に異なり、相互に相争う二つの秩序、国家の強制秩序と社会の自発的秩序とへの社会全体の分裂は、統一的な構造にとって代えられるべきである。社会はこれまで「統治」の下にあったが、いまや「管理」の下に移さるべきである。そして管理は、統治のように社会に対立し、かつ「法律家」や軍人からなるところの階層に委ねらるべきではなく、社会の自然的指導者たる生産の指導者に委ねらるべきである。 p.31 - p.32

彼[サン・シモン]に欠けているのは、この構造的更新を可能ならしめる真の有機的な社会単位についての構想である。 p.34

サン・シモンは、社会の改築にとって、小さな社会単位の持つ意義を感じてはいたが、知ってはいなかった。 p.34

#### フーリエ

フーリエにとっては、まさにこの社会単位がすべてである。かれは自分が「組合の秘密」を発見したと信じ、そして組合のうちに「利害的結合の秘密」を見た。 p.34

フーリエがこの原理(すべての産業部門における大規模な独占の普遍的組織)に反対して立てたのは、「生産および消費の地盤における共同体的組合」であり、したがって生産と消費との結合に基づく自治体的社会単位の建設である。 p.34 - p.35

しかしひとは、フーリエ自身の体系の説明や計画案のうちに、彼の原理の具体的実現をさがしても徒勞であろう。 p.35

・・・ひとは、機械主義的幻想の刻印を帯びたこれらの社会単位が、新しい正しい秩序の細胞たろうとする要求を不当に出していることに気づくのである。 p.36

だがそれらは、その画一性の故に——外見上のあらゆる内部的豊かさにもかかわらず一つ一つが同様の図式、同様の機構をなしている——社会の構造的更新に全く不適切である。 p.36 - p.37

単位間の関連は彼の体系にいかなる場所も占めていないし、各単位はそれ自体一つの世界であり、また常に同一の世界なのである。 p.37

なぜならばそれら単位は個々人のように多様ではなく、相互に補うこともなく、したがってまた調和を形成しえないからである。 p.37

### オウエン

オウエンの教説は、サン・シモンやフーリエの場合とは全くちがってこうした実際から、実験と経験から生まれたのである。 p.38

彼の教説は、思想史的にはフーリエの理論にたいする解答であり、問題の思弁的解決に対置される経験的解決である。 p.38

ここでは、それから新たに社会を建設すべき社会単位を有機的なものとして特徴づけることができよう。 p.38

ここでわれわれは、いかにオウエンが、フーリエとはちがって、必然的かつ排他的な共有ではなく、むしろ財産の結合および協同組合化の形態を、同様に必ずしも消費の平等ではなくてむしろ権利と機会の平等を原則とするという、真の共同社会の簡明な前提にまで進んでいるかを知るのである。 p.38

「共同社会的な生活とは」とテンニースは、「共同社会」すなわち人びとの「永続的な真の共同生活」の歴史的形態について語っている、「相互的な所有と享受、共有財産の所有と享受」である。 p.38-p.39

「相互的な所有と享受」すなわち成員相互の相応した協力と呼んだものが成立するのである。まさにこの考えこそはオウエンの計画の基礎をなすものである。(後にはさらに進んで「財産の共同および協同組合的結合」をも彼の計画した<sup>ジートルング</sup>移住地のもっとも基礎的原則に数えている。) p.39

彼の計画を実現するためには、大々的な教育活動が必要であることをオウエンは見のがしてはいない。 p.39

オウエンは結局それが全社会秩序を、特別にはまた支配者と被支配者との間の関係を変える問題であることを知っていた。 p.39

「人間が個別化されたままである間は」すなわち社会が個々人の間の真の関係から構成されない間は、いまの状態が続かざるをえない。変化は、社会全体にわたって行われる前に、計画された共同体的農村の一つ一つにおいて成就されるであろう。 p.39-p.40

個々の農村を治める委員会が「統治される各個人に対立せずしてむしろ緊密に結びついているところの恒久かつ老練な地域統治を構成する」であろう。 p.40

オウエンが、新しい社会は古い社会のさ中から成長し、それを内部から更新するものと考えていることは明らかであろう。 p.40

#### まとめ

サン・シモンは、社会は二元的秩序[国家の強制秩序、社会の自発的秩序]から統一的秩序に移るべきであり、社会全体の指導は、政治的秩序が本質的に異なる特殊の層として優位におかれることなしに、社会的機能それ自体から行われるべきであると主張する。 p.41

これにたいしてフーリエは、オウエンと同様に、そうしたことは、生産と消費の結合の上に建設される社会、すなわち生産と消費とが互いに結び合わされる社会単位、したがっていよいよ広範囲に自給自足のために労働するところのより小さな共同社会からなる社会においてのみ可能であり、また許されることができると答える。 p.41

フーリエの解答では、これらの単位の一つ一つは、個人の所有および要求については現在の社会と同じような状態にあるが、ただ衝動と活動との合致によって矛盾から調和へ導かれるであろうと知っている。 p.41

それに反してオウエンの解答は社会の変改はその一つ一つの細胞並びに全体の構造について遂行されなければならないこと、個々の単位の正しい秩序のみが正しい全体の秩序を確立しうることを語っている。これこそは社会主義の建設なのである。 p.41

#### 4. プルードン

プルードンは、「ユートピア的」体系に逆戻りしようとは思わなかったし、これら体系の本質的原則にも強く反対したけれどもやはりそれとともに進んだ発展の線をたどった。彼は、まさしく既往のすべてを前提とするより高い平面に立ってのみ新たに歩み始めることによって、この線をたどりつづけた。しかし、その際プルードンは、古い体系に新しい体系をつけ加えることには深い嫌悪の念をいだいていた。 p.42

「・・・人類の体系は、人類の終局点においてのみはじめて知らされるであろう。・・・」 p.43

何人もプルードン以上に誠実かつ辛辣に時代の社会的現実の秘密を探求しなかった。 p.43

彼は社会をその対立と矛盾とにおいて観察し、これを認識し表明しつくすまで止めなかった。 p.44

プルードンは矛盾のうちに身を潜め、矛盾に耐えるだけの力と勇気をもつ人物であった。 p.44

プルードンは、ヘーゲルの意味での総合、すなわちいかなる否定の否定をも求めはしなかった。彼が求めたのは、1844年の手紙でいっているように、「あらゆる矛盾の総合的解決」である。 p.44

プルードンにとって定立と反定立とは異なる歴史的時期に体现するのではなく、共存するところの範疇であった。 p.45

彼は(あらゆる歴史的探索にもかかわらず)いかなる歴史的思想家でもなく、社会批判的思想家であって、それが彼の強みでもありまた限界でもあった。 p.45

「すべての観念が(中略)もし人々がそれを排他的絶対的な意味にとるときは、あるいはこうした意味に心を奪われるときは、誤謬であり、すなわち矛盾しており、不合理である。」 p.45

彼は、誤れる絶対的信仰、宿命の支配からの解放にこそ人類本来の進路を認めている。 p.45

「人間はもはや機械化されることを欲しない。人間の努力は宿命からの脱却を目指している。」 p.45

フランス革命とともに告げられた「社会的時代」(中略)は、宗教および政府の原理に対する経済の原理の優位を特徴とする。 p.46

サン・シモンは国家の改造から出発したが、プルードンは社会の変改から出発した。社会の真の新たな形成は、社会的秩序と政治的秩序との間の関係の根本的変更からのみ起ることができる。問題はもはや一つの政治制度を他の政治制度に代えることではありえない。社会に接木された政治制度に、社会本来の制度がとって代わらなければならない。 p.47

「市民の抑圧及び国民の頽廢の第一の原因は、公權力の単一かつ体統的な集中化である。・・・この巨大な寄生虫をできるだけ早く始末することが必要なのだ」 p.47

「国家の任務の制限こそは自由、集団的および個人的自由にとって死活の問題である。」 p.48

プルドンの根本思想が何ら個人主義的ではないことはここでもすでに明白である。彼が国家に対立させているのは個人そのものではなくその集団、個人の自発的結合としての集団との有機的関連における個人である。 p.48

彼の反中央集権主義はいよいよもって自治体主義と連合主義(中略)に向かって進み、すなわち彼はいよいよ構造主義的となったのである。 p.49

「高度の中央集権化は」、と彼は 1860 年に書いている、「連合主義的制度と自治体的習慣とが、これによって代わることによって」消滅すべきである。 p.49

「自然的諸集団を維持することこそは」、とフルードンは 1863 年に書いている、「選挙権行使にとって最も重要である。これこそは投票の本質的前提条件である。それなくしては投票に何らの本源性も、何らの公明さも、はっきり表明されたいかなる意味も存在しない。・・・選挙活動における自発的集団の破壊は、民族そのものの道徳的破壊であり、革命の思想の否定であろう。」 p.50

今や「公共意識の窒息、人民主権の自殺」でしかない普通選挙権は事実的集団構成の表現となっではじめて道理にかなない、道徳的また革命的なものとなる。その前提はもちろん「職務部門の均衡が組織化され、特権が廃止」されることである。 p.50

プルドンは、連合主義にとって「解決すべき真の問題は政治的問題ではなくして経済的問題」であることを決して見のがしてはいない。 p.50

労働は、いま資本が行っているように、企業の資金を自ら調達することができるかどうか、また企業の所有と指導が集団化されうるかどうかという問題である。(中略)プルドンのこの肯定的解答の構想がその円熟した形での「相互主義」である。 p.51

「一産業においてすべての労働者が」と彼は書いている、「彼らに賃銀を支払い彼らの生産物を保有する起業家のために働く代わりに、たがいのために働き、かくて共同の生産物をつくることに協力し、その利益をたがいの間にわけるとき、相互性、互惠が存在する。あらゆる集団の労働を結合するところの相互性の原理を、社会単位としての労働協同組合にまで拡張せよ、そうすると諸君は、政治的、経済的、美的等すべての視点から見て従来文明とは全く異なる文明を創造するだろう。」 p.51

「すべての者が結合し、すべての者が自由である。」 p.51

かくして共産主義的中央集権主義は、プルードンにとって、無意味な、網目のない完全なものにまで高められた絶対主義的中央集権主義の一変種のように思われた。 p.53

この「独裁的強権的教義的体系は次の原則から出発する。すなわち個人は本質上集団に従属し、その権利と生活とはただ集団にのみ由来する。市民は、幼児が家族に属するように国家に属する。市民は国家の権力と所有との手中にあり、あらゆる事柄において国家に従属し服従する義務がある。」 p.53

こうした点から、マルクスが、プルードンは「革命運動を理解する」能力がないといっている理由が理解できるように、プルードンがマルクスを「社会主義の条虫」と呼んだ理由も理解できるのである。 p.53

「われわれが要求するのは普通選挙によって選ばれた労働者のみからなる会議所、労働会議所である。」この要求は、サン・シモンからプルードンへの新しい社会思想の発展を示す明白な証左である。 p.54

社会再組織の考えから構造的更新の考えに進むことによって、プルードンは決定的な一步を踏み出した。「産業制度」は新しい構造を意味しないが、「連合主義」はそれを意味するのである。 p.54 – p.55

プルードンは、互いに浸透しあう二つの構造様式を当然に区別する。 p.55

- 経済的構造： 「農工連合」と名づけるところの労働集団の連合
- 政治的構造： 権力の分散、統治権の分立、コミュンおよび地方団体の最大限の自治の保障、自然的集団から組み立てられるより緩やかなより直接的な仕事の指導をもってできるだけ広範囲に官僚制にとって代えること等

社会の生活は個人の集団への、集団の連合への結合において営まれる。 p.55

「あたかも多くの人々が、彼らの努力をともにすることによって、質においても強さにおいても各自の力の総和にまさる集合力を生み出すと同じように、相互に交換関係のうちにもち来される多数の仕事場は、より高次の活力を生み出すであろう。」これは特別に「社会力」と考えることができよう。 p.55 – p.56

「個人の方の集合化と集団の相互関係によって、全国民は身体のような形態を取得する。」そして現実の人類は諸民族からその連合の連合として構成されるのである。 p.56

政治的中央集権化は自明的なこととされているが、それはたんに集団的虚栄におもねるからではなく、さらに「理性は、幼児におけると同じく国民においても、大きさや大量と同様に単純さ、画一性、同一性、および階続性を求める」からである。 p.56

「・・・中央集権的体制は大きさ、単純さおよび発展についてはすこぶるりっぱである。それにはただ一つのこと欠けている。すなわちこの体制において人間はもはや彼自身のものではない。そこでは彼は自分を感じることがなく、生きてもいないし、考慮されてもいない。」 p.56-p.57

現代の法治国家では「様々の集団は多くの物事に対していかなる指図をも必要としない。集団はその良心と理性以外のインスピレーションなしに、自らを治めることができる。」 p.57

現代法の原則に従って構成されたすべての国家において、統治活動の漸次的減退、地方分権化が行われている。 p.57

今日の技術の発展は、人口の大都市への集中を不要にする傾向があり、「大衆の分散ならびにその再分布がはじまっている。」政治的重心は次第に都市から「新しい農業および工業集団」に移るにちがいない。 p.57

「中央集権化の熱病が」と彼は 1861 年に書いている、「世界に蔓延している。人びとは、彼らになお残る自由に飽き、ただそれを失うことを望んでいるとあってよいであろう。・・・いたるところに見られるのは、権威への欲求、独立への倦怠なのか、それともたんに自治の無能力なのか。」 p.58

人間精神のこの重い疾病にたいしては、人間の内奥に働く建設的、構造更新的諸力のみが救治することができる。これを表現したのが、1863 年のある政治的著作の結論でプルドンが述べているところの「理念」である。 p.58

「この理念は発生し、すでに流布している。」しかしそれを実現すべき勢力を獲得するためには、それは「事態の内部から生起」しなければならない。 p.58

サン・シモンと同様にプルドンは、社会の構造的更新の問題を問題自体としてはとりあつかっていないが、それを前面に押しだし、しかも一層の充実と確実さをこれに加えた。またサン・シモンが新しい社会の細胞として役立つべき社会単位の問題を提起しなかったのと同様にプルドンも、この問題にはるかに接近したにせよ、本質的にはそれを未解決のままに残した。 p.60

プルドンがこの問題をもっと強くとらえなかった理由は、とりわけ、ルイ・ブランが唱えた如き国家の建設による、一切の社会悪に対する画一的万能薬としての「組合」、国家によって設立され融資され統制される農業および工業の「社会的工場」に対する彼の疑念である。 p.60

プルドンの疑念は、上に述べたように、新たな「国家理由」に、したがって画一性、排他性、抑圧に対するものであった。 p.61

プルドンは社会の新しい秩序を画一化と同一視することを拒否する。秩序とは彼にとって多様性の正

しい秩序のことである。エドゥアルト・ベルンシュタインが、プルードンは相互主義的協同組合に認めたことを、本質上独占的な協同組合には否認したといったのは正当である。 p.61

プルードンは「上から」来る一切のもの、民衆に強制されるもの、特権で飾られるものに対して深い嫌悪の念をいだいた。これに関連して新たな集団的エゴイズムの蔓延を恐れた。なぜなら集団的エゴイズムは個人的エゴイズムよりも危険なものと思われたからである。 p.61

すなわち組合が資本主義の精神にとらえられ、機会や景気を容赦なく利用するという危険である。疑念は深刻であった。それは、正義をもって真の社会主義の標識とする彼の根本的見解に根ざしていた。そして正義はそれ自体自由と秩序とを互いに結合せしめ、また均衡せしめるのである。(プルードンによれば二つの観念、自由と統一または秩序が存在する——「人は両者を均衡せしめることによって両者とともに生きる決心をしなければならない。」これを可能ならしめる原理を「正義」というのである。)

p.61 – p.62

しかしプルードンが告げる将来の人間社会の構造形態、自由と秩序との均衡を実現し、彼が連合主義と呼ぶところの構造形態は、単に(彼がなしたように)連合すべき大きな単位すなわち諸民族<sup>フオルク</sup>を問題にするだけでなく、さらにそれらの連合的結合によってはじめて真に民族が構成さるべきより小さな単位をも問題にすることを彼に要求した。この要求をプルードンはみたさなかったのである。 p.62

・・・次の問いに対する十分な回答を彼に見出すことができない。すなわち「いかなる社会単位が真の民族的秩序にまで連合するか、」あるいはもっと正確には「真の民族的秩序、新しい正義の社会構造にまで連合しうべき社会単位は、どのようにして形成されなければならないか」という問題である。 p.62 – p.63

かくしてプルードンの社会主義は本質的なものを一つ欠いている。なぜなら、現存の社会単位が、また古い共同体の形態を保持している社会単位が、そのままで正義のうちに相結合しうるかどうか、新たに成立する単位ととも、その成立の当初からすでに同じ自由と秩序との結合が刺戟となり形成力となって働くのでなければ、それが可能であるかどうかについて、われわれは疑を抱かざるをえないからである。

p.63

## 5. クロポトキン

クロポトキンは、プルドンの遺産を完成するためにそれを意識的にとりあげる。 p.64

彼はもろもろの矛盾の光景を和らげることにあってプルドンを単純化しているが、これは短所である。しかしまた同時にプルドンを歴史的なもののなかに移し入れることによって単純化しているが、これは長所である。 p.64

「われわれの文明の全歴史を通じ」と彼はいつている、「二つの相反する伝統、二つの傾向が互いに対立した。ローマの伝統と民衆の伝統、帝国の伝統と連合主義の伝統、強権主義の伝統と自由主義の伝統とである。そして両者は社会革命の前夜にも対抗する。」 p.65

確かにクロポトキンの国家概念は狭きに失している。中央集権的国家を国家一般と同一視することはできない。歴史上、小さな諸結社の固有のあり方を抑圧するかすがいとしての国家だけが存在するのではない。さらにそれら結社がその中で結合する枠としての国家も存在するのである p.66

「緊密に集中化され、人知の最高の浪費を用意し、配電盤の一握りで操作できる命令機構」(全体主義の多彩な代弁者カール・シュミットはリヴァイアサンをこう名づける)に対しては、有機体的な何ものも対抗することができない。 p.67

中央集権主義を擁護する一切の教説を論難せざるをえない者には、個々人の安全——この目的のためにリヴァイアサンは不可欠とみなされる——ではなく共同社会的実質の維持、人類における共同体生活の更新が最も重要事である。 p.67

\* 論難： 不正や誤りを論じ立てて、非難し攻撃すること。 p.67

クロポトキンも、国家秩序一般ではなく、中央集権的国家装置と闘っている限りでは、科学のうちに強力な同盟者をもっている。 p.67

個々人や諸集団の間の対立は、たしかに決してなくならないうし、またなくなるべきでもあるまい。ただそれらの対立は調整されなければならない。 p.68

しかしわれわれは、個々の争いが係り合いのない大きな全体社会にまで拡大したり、あるいは中央集権的、無制限的支配の確立に利用されたりすることのない状態を目ざして努力することができるし、また努力しなければならないのである。 p.68

クロポトキンは、プルドンがかえりみななかった多くの歴史的関連をとらえてはいるけれども、ときには過度の国家と適度な国家、ときには無用な国家と有用な国家との不十分な区分についてと同じく、他

の重要な点においても、その洞察は現実主義的に十分ではない。P.68

だが歴史は、「これら闘争こそは自由都市における自由な生活の保証そのものであった」こと、共同社会はこれら闘争を通して成長し若返りしたことを示している。国家間の戦争とは反対にコミューンでは、「個人の自由の獲得と維持、連合の原理、団結し活動する権利についての争」であり、したがって「現存権威の重みが天秤皿の何れの側にもかけられることなく闘争が自由に行われた時代であり、人間精神の最も大きな発展の時代」であった。 p.68-p.69

これは、本質的には正しいけれども、一つの決定的な点を十分にはとらえていない。集団的エゴイズムの危険は、分裂や抑圧の危険と同じく自治的共同体においても国家や政党にくらべてほとんど少なくはないし、とくに共同体が協同組合として生産に関係するときはそうである。 P.69

クロポトキンとても、この危険に盲目ではない。例えば、彼はあるとき、現代の協同組合運動が、その起源においては本質的に相互互助の性格をもっていたのに、しばしば「株式資本的個人主義」に退化し、「協同組合利己心」を養っていることを指摘した。 p.70

クロポトキンは、すでにプルードンが示唆したことであるが、社会主義的自治共同体はコミューン間の二重の結合、すなわち様々に交錯し、相互に支持しあう地域的自治体の連合と職業的共同体の連合とを基礎としてのみ達成されることをより明確に理解した。 p.70

「われわれは」と彼は自叙伝に書いている、「文明諸国において、古い社会形態にとって代わるべき新しい社会形態の芽生えに気づいた。・・・これらの集団のすべては相互的協定によってその努力を一つにするであろう・・・個人的発意が奨励され、画一および集中化へのあらゆる傾向が防止されるだろう。その上、この社会は一定不動の形態に硬化することなく、不断に変化していくであろう。なぜなら、それは絶えず成長する生きて有機体であろうからである。」 p.71

いかなる究極的固定化をも認めない——これがクロポトキンの健全な根本の感情である。 p.71

「われわれは社会の構造を、決して究極的なものとしては構成されえないものと考えている。」 p.72

このような社会構造は、民衆の社会的および政治的自発性をその時々可能な最高度に活動させることを意味する。 p.72

クロポトキンが共産主義と呼び、もっと正確には連合主義的コミューン主義と特徴づけられるべきこの秩序は、「強制されることはできない。それは、すべての人々の不断の日常的な努力によって支持されないときは、存在することはありえないであろう。それは職権の雰囲気の中では窒息するであろう。より適確にはこの秩序は、あらゆる人々の間に幾千となく多くの共通の事柄のための永続的な接触が形成されない限り、存立することはできない。それは、横町、街区、地区、自治体等の最小単位に局地的な独立の

生活を形成することなしには生きることはできない。」 p.72

ここでわれわれは、クロポトキンが攻撃しているのは結局国家秩序そのものではなく、現在のあらゆる形態の国家秩序だけであること、彼の「アナキー」はプルードンのそれと同じく実際は無支配であり、無政府ではなく無支配であることをとくにはっきり知るのである。 p.73

すなわち、「個々人之間および集団の間のあらゆる関係が正されなければならない」ということである。しかしこのことは、社会的自発性がかき立てられ、それと同時にこの自発性に活動すべき方向がさし示されるときのみに、達成されることをも彼は知っている。 p.73

社会秩序の決定的変革が革命なしに起こりえないことは、クロポトキンにとって自明的である。それはプルードンにとっても同様であった。 p.73 - p.74

革命の悲劇とは、その積極的な目標を基にして考察するならば、達成しようとするのが革命前すでにある度合いにまで予め形成されており、したがって革命行動がたんにそれに十分な発展の場所を獲得するだけであるのではないときには、またその理由で、革命は、正に最も誠実な最も情熱的な革命家たちが持ちきたそうと望んだものとは正反対の結果になるということである。 p.74

その死の二年前に痛ましくもプルードンはこう述べている。「われわれに中央集権化をもたらしたのは革命の闘争なのだ。」 p.74

クロポトキンは、革命が新しい「同様に有害な、もしくは一層有害な」中央集権主義に終わるのを防ぐためには、また革命において、「民衆——農民および都市労働者——自体が組織的な仕事を始める」ことを可能にするためには、革命の勢力に教育的に影響することで十分であると大体信じていた。「それ故共産主義を通して社会革命を開始することがわれわれの問題である」。 p.74 - p.75

クロポトキンはバクーニンと同じように、次の基本的事実、革命は、政治的領域におけるとは反対に社会的領域においては、なんら創造的な勢力ではなく、むしろたんに開放的、救出的な、また助力的な勢力をもつこと、すなわち革命は、革命前の社会の胎内においてすでに予め形成されたものを仕上げし、自由にし、強力にし、完全なものにすることができるだけであること、社会的生成について見れば、革命のときは受胎のとき——これが予め行われるとして——ではなく、出産のときであることを見のがしている。 p.75

彼はここで、分業の原理のいよいよ甚だしい極端化、過度の専門化に対して労働統合の原理、集約農業と分散化された工業との結合の原理を対置している。 p.75

彼は、田園と工場とを同時に基礎として建設され、そこでは同一人が交互に田園と工場とで働き、しかもそれが何ら技術の退歩を意味せず、むしろ技術の発達と固く結びつきながら、人間が人間としての権利

を持つにいたる農村の像を描いている。このような変改が現在の社会秩序では「完全には遂行」されえないことをクロポトキン知っている。それにもかかわらず彼はたんに明日のためだけではなく、なお今日のために計画する。 p.75 – p.76

「資本と労働との間の現在の関係を変更しようとする一切の社会主義的な企図は、もしそれが統合への傾向をかえり見ないならば、失敗に終わるであろう」ことを彼は強調する。しかし彼はまた、願望する将来が「すでに可能で、すでに実現しうる」ことを力説する。そこから、社会の構造的更新を直ちに開始しようという要求へはほんの一步、もちろん決定的な一步でしかない。 p.76

## 6. ランダウアー

クロポトキンを越えるランダウアーの歩みは、まず第一に国家の本質に対するその率直な洞察に存する。国家は、クロポトキンが考えるように、人が革命によって破壊することのできる制度ではない。 p.77

「国家は一つの関係、人びとの間のある関係、人びとが互いにとる態度のある様式である。人は国家を破壊するには、いまと別の関係に入ることにより、互いにいまと別の態度をとることによってである。」 p.77

人びとは現在互いに「国家的」関係、すなわち国家の強制秩序を必要とし、またそこに表現されているところの関係に立っている。したがってこの強制秩序は、ただ人びとの間のこの関係が別の関係にとって代えられる度合いに応じてのみ克服されることができる。 p.77

この別の関係をランダウアーは「民衆」と呼んでいる。これは人びとの間に実際に存在するが、しかしまだ団結や連合ではなく、まだより高次の有機体になっていない結合体である。 p.77

・・・今までは個々の、原子化された人びとの精神と願望のうちには生きていない社会主義が現実となる。——それは国家の内部においてではなく「外部で、国家の外において」すなわち、まず国家の傍で行われる。 p.77 – p.78

「社会主義は、新奇なものの案出ではなく、現に存在するもの、すでに成長しているものの発見であることを人はいつかは知るであろう。」 p.78

それ故社会主義は、十分な数の人びとがそれを欲するならばあらゆる時代に実現可能である。(中略)それが実現されるかされないかは技術的狀態に依存するのではない。それは、人びとに、人びとの精神にかかっている。 p.78

「社会主義はあらゆる時代に可能であり、またあらゆる時代に不可能である。社会主義はそれを欲する、すなわちそれを実行するに適した人々が存在するときには可能である。人びとがそれを欲しないかあるいはただそれを欲すると称するだけで実行する力がないときには不可能である。」 p.78

「国家」は一つの状態である。一定の時機に一定の場所で生活を共にする人びとは、ただある程度までは自発的に相互に正しい生活を営み、自発的にだたしい秩序を守り、自発的に共同の業務を処理することができる。この能力を時々限定する線が国家のその時々基礎である。別の言葉でいえば自発的に正しい秩序をつくる時々無能力が、正当的な強制の度合を決定する。 p.79

「原理上」の国家と事実上の国家とのこの時々の違いを私は過剰国家と呼んでいるが、この違いは、集積された権力は強要されない限り退かないという歴史的事実によって説明される。 p.79

権力の原理的土台は腐朽するが、権力自体はそれを強制されない限り枯死しない。 p.79

すなわち社会の構造的更新を念とする人びとにとって起こる課題は、国家の事実上の基線を原理上の基線にまで押しもどすことである。しかしこれは、真の有機的な構造の形成と更新、人間個人及び家族の様々な共同体への、また諸々の共同体の連合体への結合を通して生起することである。このような発展こそは、そしてこれのみが国家を排除することによって国家を「破壊する。」 p.80

もちろんそれは、つねにその時々が無用な、根拠を失った国家の部分のみについてのことである。それを越えた行動は当を失し、失敗せざるをえないであろう。なぜならそれは、限度を越えるやいなや、その先の行動に要求される建設的精神を欠くからである。 p.80

国家と並んで共同社会が、すなわち「孤立した原子的個人の総和ではなく、様々の集団から一つのアーチへのように自己を拡大しようとしている有機的な共属性」が存在している。しかしこの共同体的現実はいりから目覚まされ、それが国家の殻の下に潜んでいる深みから呼び出されなければならない。このことは、人間の殻たる内心の国家化が打ち破られ、その下で根源的現実の上にまどろんでいるものが目覚まされることによる以外には起りえない。 p.80-p.81

「これが社会主義者の任務であり、また彼らによって呼び寄せられ、引き起こされる民衆運動の課題である。すなわち硬化した心情をときほぐし、それによって埋もれていたものが再び表面に現われ出て、真に生きたものであるのにいまは全く死んだように見えるものが再び姿を現わし、若しくは成長するようにすることである。」このようにして更新した人びとこそ社会を更新することができる。そして彼らは、彼らの精神に新しいものとして知らされたのが、太古以来の共同社会的要素であることを体得したので、真の共同社会的形態を保ってきたすべてのものを新たな建設のうちに組み入れるであろう。 p.81

気儘にまた無駄にではなく、正当にそして将来のために建設する者は、自分に委ねられ、自分を力づけるところの古い伝統と内的に相結合しながら行動する。このことから、ランダウアーが国家的関係に変わって人間が入ることのできる「他の」関係を新しい名で示すのではなく民衆と呼ぶ理由が明らかになる。 p.81

「この相似性、不同のなかでのこの平等、同じ民族を結びつける特質、この共同の精神こそは確かな事実である。君たち、自由な人びとや社会主義者はこの事実を見のがしてはなるまい。社会主義、自由及び正義はただ、古くから共属してきた人びとの間で達成されるはずである。また社会主義は抽象的に建設されるのではなく、人びとの間の調和に応じて具体的な多様さのうちに建設されるであろう。」ここに民族と社会主義との真の結合が見出される。 p.82

「共同体精神による民衆の再生のみが救いをもたらすことができる。」 p.82

「現在及びあらゆる時代に、根本的改革を欲する者は、現に存在するところのもの以外に改革すべき何ものも見出さないであろう。・・・」 p.82

社会主義者であることは、時代のすべての共同精神および共同社会的な生活と生きた関係を結び、非共同社会的な現在の奥底になお潜むそれらの痕跡を、目覚めた、とらわれない眼をもって探求し、またこれが可能などころではどこでも、新しい形態において企画したことを、強固な紐帯で永続的なものに結びつけることを意味する。 p.83

だがそれ[社会主義者であること]はまた、

- 一切の図式的な手段方策の追及をとらないように用心すること
- 人間および人間社会の生活では二点間の直線が最も長い線になるかも知れないことを知り、
- 社会主義的現実への真の途は、たんに自分が知らないこと、知るべくもないこと、予期しないことと予期すべくもないことから生ずるかもしれないことを理解すること
- いかなるときもできる限りその途を目ざして活動的に生活すること

を意味する。 p.83

かつてランダウアーは、ある英雄的デモクラシーの詩人ワルト・ホイットマンについて、(中略)保守的精神と革命的精神、個人主義と社会主義とをひとつにしているといった。このことはまた、ランダウアー自身についてもいうことができる。 p.83 - p.84

彼が心に抱いているのは、結局革命的保守、すなわち保存する価値のある、また新たな建設に役立つ、社会的存在の諸要素を革命的に選択することである。 p.84

\* 拱手傍観(きょうしゅぼうかん) : 何も手をくささないで、わきでながめていること。 p.84

ランダウアーが考え計画したすべて、彼が語り書いたすべては、(中略)またとりわけ建設しようとする社会主義的現実について計画したすべては、彼にとって、革命への大きな確信とそれへの大きな意志とに浸透されていた。 p.84

彼が革命と呼ぶ長期にわたる解放闘争は、「革命ではなくして再生を意味する精神がわれわれをとらえる」とき、はじめてその成果を結ぶことができる。 p.85

この長期の革命のなかでの個々の革命をランダウアーは精神の火熱浴とみ、かくしてまさに革命はその究極の意味では再生そのものとなる。 p.85

「この攻撃運動の火と熱狂と友愛のうちに(中略)人々を結び合わせる特性、すなわち同時に力でもある愛を通しての積極的な結合の観念と感情とが目覚める。そしてこの当座の再生なしにはわれわれは生き続けることができないし、破滅しざるをえないであろう。」 p.85

「ユートピアは、もちろんそれが語ることよりも語る仕方において極度に美しいものであるけれども、革命が達成するところのもの、まさしくその終局は、前から存在したものと大してちがわないのである。」 p.85

革命の力は反乱と否定のうちにあり、革命はその政治的手段をもってしては社会問題を解決することはできない。 p.85

「われわれは(中略)今日すべての国々の情勢からして、革命の誘発は、よし成果を見るときにも、結局は帝国主義という国家資本主義的権力の伸長に役立つにすぎないことをなんら疑ってはいない。また革命の誘発は、たとえ初めは社会主義的な色彩を帯びていようとも、(中略)政治の流れに容易に導きこまれることにも疑問の余地はない。なぜなら、こうしたすべての反乱は実際には、たんに政治革命もしくは国民戦争の手段であって、社会主義的激変の手段では全くありえないからであり、社会主義者たちが実際はロマン主義者として敵の手段に奉仕し、新しい民衆と新しい人類とを実現すべき手段を用いていないしまた用いることを知らないからである。」 p.86

「やがて人びとは(中略)すべての社会主義者の中でもっとも偉大な社会主義者のプルドンが、よし今日は忘れさられているにせよ、無比なことばで明言したこと、すなわち社会革命は政治革命となんら類似するところがないこと、社会革命は多種多様の政治的革命なしには活発にはならないし、また持続もできないが、しかしそれは平和的建設であり、新しい精神からの、また新しい精神の組織化であって、それ以外の何ものでもないことを、今よりもはっきりと知る時が来るであろう。」 p.87

すなわち真の「社会変革は愛と労働と平静のうちにのみ到来することができる。」 p.87

したがって、人びとが制度を準備し、そのための地ならしとしての革命を成就するためには、「解放」せらるべき精神がこの準備のために十分な度合いにまで彼らのうちにすでに生きていなければならないことは明白である。 p.87

政治革命が社会革命に役立つためには三つのことが必要である。 p.88

1. 革命家たちは土地を解放して手持ちの共同財産となし、ついでその共同財産の上に諸社会の連合体を完成することを固く欲しなければならない
2. 共同財産は、土地解放ののちそうした完成がなされるように制度として準備されなければならない
3. この準備は真の共同体精神において行わなければならない

従前の社会主義者のうち何人も、この第三の「精神」が新しい社会的生成にたいしてもつ意義を、ランダウアーほど深く認識しなかった。人びとは彼がそれでいおうとしていることをただ体得しなければならない。 p.88

「いいかえれば、より偉大な文化の段階が実現するのは、多様な組織形態および超個人的構成体を統一するものが、権力の外部的紐帯ではなく、個々人のうちに存在し、世俗的・物質的利害の彼方を志向するところの精神であるような場所においてである。」 p.89

人はこの共同精神を今日の如き時代、すなわち「精神の喪失およびそれとともに暴力の時代、精神の喪失

およびその故に個々人の精神の強度な緊張の時代、個人主義およびその故に原子化と根を引きぬかれて塵と化した大衆との時代、精神を欠きまたその故に真理を欠く時代」に、呼び起こすことができるであろうか。 p.90

現代は「頹廢の時代であり、またその故に過渡的時代」である。現代がそうであるが故に、現代、まさしく現代においてこそこの精神の出現が切望されるのである。かくのごとき切望こそは革命である。しかし精神にその場所をしつらえるのは現実である。 p.90

「(前略)われわれを途に就かせるものは精神ではなく、われわれの歩む途がわれわれのうちに精神を生み出すのである。」 p.90

しかしこの途は、「今の生活をつづけることは内心不可能であることを悟った人々が、相団結し、労働を彼らの必要に役立たしめること、すなわち、あらゆる困苦欠乏の下にありながらも<sup>ジートルング</sup>移住地や協同組合を建設すること」に通じている。これらの人々のうちに活動する精神は、かれらをその共通の途にせきたてる。そしてこの途において、この途においてのみ、精神は新しい共同精神となることができる。

p.90 – p.91

「われわれ社会主義者は、その精神が結合的精神として人々を彼らの共同生活に導くため、それに自然性と現実性とを与えようと欲する。われわれ社会主義者は、精神を感性的身体的なものとし、精神を活動させることを欲し、またまさにそうすることによって感性とこの世の生活を精神的なものとなすであろう。」 p.91

生きた精神によってのみ移住地は実現され、それなくしては幻影でしかない。しかし精神がそこに生きているならば、精神はそこから世界に吹きわたり、精神なくしては空の容器、目標のない目的制度でしかないすべての協力および結合の機関に浸透することができる。 p.91

社会主義とは、とランダウアーはいつている(1915年)、「人々の共同生活を共同精神に基づく自由な結合に、すなわち宗教に持つていこうとする企図」である。これはおそらく、現在のあらゆる宗教的象徴や宗教的信条を絶えず拒否したランダウアーが、「宗教」という言葉を積極的なまた結合的な意味で語った唯一の箇所であろう。——それは、彼が熱望するもの、すなわち共同精神にもとづく自由な結合を表現するものとして用いられている。 p.91

共同精神を志向するランダウアーは、共同精神にとってこの大地以外にいかなる場所も存在しないこと、すなわち、土地が再び人びとの共同社会的な生活および労働の支担者となる度合いにおいてのみ、共同精神のための場所が存在することを知っている。「社会主義の闘いとは土地のための闘いである。」 p.92

「何ものも、結合した消費者たちがその相互的信頼によって彼ら自身のために働き、自ら工場、仕事場、住宅を建設し、土地を獲得するのを妨げることはできない。彼らがただ欲し開始しさえすれば、何ものも。」これが、ランダウアーの念頭にある、新しい社会の「基礎形態」としての共同体の像、社会主義的

村落の像である。 p.92

プルドン及びクロポトキンと同じ様に、彼もまた、今日の人々が夢想し、認知し、工夫し、計画するものの上に、社会主義的渴望を固定することなど考えない。 p.93

ランダウアーは決して絶対的な目標を認めず、ただ「われわれが、将来に眼を注ぐ限りにおいて」最初に追求しようとするものを認めるにすぎない。真の社会主義はすべて相対的である。 p.94

「共産主義は絶対者を目がけるが、もちろんそれは言葉の上の創始以外のいかなる創始をも見出しえない。なぜなら、一切の現実から引き離された絶対的なものは、言葉だけだからである。」 p.94

社会主義は決して絶対的なものではありえない。社会主義とは、時々を与えられた条件の下で、その時々意欲され実行されるところのもの度合いと形態に応じて、人類のうちにその時々人間の共同社会が生成されることである。固定化はすべての実現を脅かすものである。 p.94

真の社会主義は更新の力を守り育てる。 p.94

「千年王国若しくは永遠のための究極的な保証策など確立しようと思ふべきではなく、むしろ確立されなければならないのは、大きなかつ包括的な均衡とこの均衡を定期的に更新しようとする意志とである・・・『さあ国中にラッパを吹きならせ！』精神の声こそはラッパである。・・・戒律としての反乱、最終的に備えた基準としての改造と変革、意図としての精神をとおしての秩序、これが、このモーセ的社会秩序における偉大にしてかつ神聖な事柄であった。われわれは再びそれを必要とする。すなわち物事や制度を究極的なものとして確立するのではなく、むしろ自らを恒久的なものとして明示するであろうところの精神による新たな規制と変革とを必要とする。革命はわれわれの社会秩序の付随物となり、われわれの戒律の基礎とならなければならない。」 p.94 - p.95

## 7. 実験

・・・1830年頃および1848年頃に、イギリスおよびフランスの労働者の最もすぐれた一部の者をわきたたせた協同組合運動の二つの大きな波も、「ロマンチック」という極印を押された・・・ p.96

- \*極印：1. 貴金属や硬貨などの品質を証明するための印。 p.96  
2. 消すことのできない、悪い行いの証拠。

確かに協同組合運動の「英雄的」形態は、組合員が、どっちみち永続的にはつくしえなかったような忠誠と犠牲とをつくすことを当てにした。 p.97

「現実の」人間は、彼がそれまでやりぬく力がなかった、あるいはないと信じていた任務を遂行することを期待されるときにこそ、「理想の」人間にいつそう近づくのである。——「より高い目的とともに成長する」、あるいはむしろ成長することができるということが真実であるのは、個人だけについてではない。そして結局は、目標と目標に対する意識および意志にかかっているのである。 p.97

現在協同組合の英雄時代は、社会の変革を当てにしたのに、その技術時代は本質的に個々の協同組合事業の経済的成果を当てにしている。 p.97

・・・われわれはまた、経済的成果は、それだけでは人間社会の構造的更新に導くに適した業績ではないことを知るのである。 p.98

社会主義は、オウエンにとっては理性の果実であったが、キング[イギリス最初の消費協同組合を設立]とビューシェ[フランス最初の生産協同組合を設立]にとっては、公的生活におけるキリスト教の教えの実現であった。二人はともにビューシェがいうように、キリスト教の教えを「社会制度に転化」すべき時期が到来したと考えた。 p.99

彼[キング]は、「どのような大きさに成長するかもしれない樹木の根」である労働から出発する。労働こそは「この意味のすべて」である。労働者階級こそは「このものを独占している。」いかなる力も彼らからそれを奪い取ることはできない。なぜならば、一切の権力が、「労働者階級の労働を指図する権力以上の何ものでもない」からである。労働者に欠けているのは資本、すなわち機械の自由な使用と、機械を使って働く間その生計を維持するだけの力とである。 p.99 – p.100

この資本と労働との結合が、現在は「資本が労働者を動物のように売買する」ことによって行われている。労働者自身こそ真の結合すなわち「自然的団結」をもたらしうるのであるが、ただ彼らはそれを知らない。彼らは、団結し、協力し、共同の資本をつくり、独立するときのみ、それをなすことができる。 p.100

協同組合の基本的原則は、キングにとっては人間と人間との間の真の関係を確立することである。 p.101

このような理想、このような「英雄的」要求は、のちに組合員の数を増やし、技術化や官僚制化が進展するとともに、支持されえなくなったことは自明的である。しかしそれには、社会の構造的更新の見地から見るならば、部分的協同組合では十分でないこととも関係がある。 p.101 – p.102

消費に基礎をおく協同組合の決定的な発展は、ようやく 1844 年にはじまった。この年、あるストライキが挫折してから間もなくイングランドをおそった重大な産業危機に際して、ロチデールの街に少数のフランネル織工<sup>おりこう</sup>や他の職業の代表者たちが集まり、たがいにくたずねた。「われわれは窮乏から身を救いだすために、何をすることができるだろうか。」彼らのなかには、各自が自分でやり始めなければならないと考えた若干の人々もいた。これはつねに、またあらゆる場合に正しいことである。なぜなら自分でやりはじめることなくしては何事も成就されえないからである。 p.102

すなわち「実行する」というのはここで実行することであり、危険を前にして逃げるのではなく、自己の力をもって危険に立ち向かうことである。 p.103

この力たるや、もちろんわずかなものであったが、ウィリアム・キングの教えをある程度信頼していた数人の織工たちは、力を結集することが可能であり、結集することができたあかつきにはおそらく何かをうち建てうるだけの力が存在するであろうことを指摘した。このようにして彼らは「協同する」ことに決定した。 p.103

現在の経済生活においてかくも大きな現実となった今日の消費協同組合は、「ユートピア」社会主義の理念から発している。 p.106

ウィリアム・キングの計画のうちには、不断に拡大し結合する小さな社会主義の現実を形成することによって、大きな社会主義の現実に到達しようとする傾向が明らかに認められる。 p.106

かくして消費の協同組合的組織は、キングにとって生産の協同組合的組織への一段階にすぎないし、これはまた全生活の協同組合的組織への一段階にすぎないのである。 p.106

しかし包括的な共同体的形態での生産と消費の有機的結合には、ほとんど近づいていない。 p.107

しかしそれはたんに技術的な組織であって、真の協同組合思想の実現ではない。 p.107

だが、考慮すべきことは、技術的経済的要求と両立しうる限り多くの自主性を個々の組合に保有しようとするいかなる勢力も存在しなかったことである。 p.107

しかしたいていの場合、大規模な協同組合制度の経営は、ますます資本主義的経営に類するものとなり、官僚制の原理が、きわめて多くの場合に、かつては協同組合運動の最も貴重かつ不可欠な財宝として尊

重された自発性の原理を全く排除してしまった。 p.108

シャルル・チードが、羊飼いに装を変えた狼のお伽話を思い起させながら、人は国家を「協同組合化」する代わりに、ただ協同組合を「国家化」するようになるという懸念を表明したことは、たしかにまちがいでなかった。 p.108

連帯の精神は、人びとの間に生きた関係が保たれている限りにおいてのみ、真に生きることができると。 p.108

かつて、フェルディナント・テンニースは、消費組合が共同購入へ、ついで自らの必要のための生産へと進んでゆくことによって、「現在の社会秩序にはっきり対立する経済組織の基礎が据え」られ、それとともに観念的には「資本主義世界は土台からくつがえされる」と考えた。しかし、資本主義の存在形態が協同組合の活動にしみこんでいる間は、「このような観念的な」状態から現実の状態が生成することはありえない。 p.108

完全協同組合への発展の問題、構造的更新という決定的問題はキングとちがってビューシェにはまだ見落とされていた。 p.109

一方ビューシェは生産協同組合の社会主義的性格及び社会主義的任務を内部から脅かす危険の大部分、とりわけ、発展してゆく協同組合事業の内部における、組合の創立に参加した組合員と後から加入した労働者との間の分化、すなわち協同組合が社会主義を信奉することをどれほど強く言明しようとも、それに資本主義的秩序の付属物という極印を不可避的に与えることになる分化の進展の危機を、驚嘆すべき鋭さをもって認識した。 p109 - p.110

だがこれらすべてから結論されることは、中世の類似の経験からと同じく、また他方消費協同組合の歴史における同様の経験からとも同じく、協同組合の内部的問題や組合のうちになお有勢な資本主義の原則の力を、よしたんに漸次的にもせよ克服することは、ひとり完全協同組合において、またそれを通してのみ成就されうるということにほかならない。 p.111

ルイ・ブランがビューシェの思想の影響を受けたというのにはありそうなことではある。しかしルイ・ブランはいくつかの決定的な点でビューシェとちがっている。 p.112

しかし彼が計画した社会改革の本質にたいする問題にとっては、この要求(国家的援助の)は、重要なことではない。それよりもはるかに重要なのは、ブランの社会的プログラム自体が中央集権的な考えのものであったという点である。 p.112

しかし彼が連帯化とよんだのは、実は、独占的地位をもつところの集中化された全経営への合併であった。 p.113

たしかにルイ・ブランが目ざしたのは、無制限な競争、彼があるとき国民議会で言ったように、「この卑怯で残忍な原理」の根源と闘うこと、すなわち個人的競争に代わって集团的競争が現れるのを阻止することであった。そしてこの集团的競争こそは実際に、内部的分化とならんで、生産協同組合を脅かす主な危険なのである。 p.113

しかし彼は、まず国家発意の計画から自由な協同組合の計画に移るやいなや、この目標に達するには、既存の協同組合の連合化をはかる方途以外にいかなる方途もないことを知っている。すなわち既存の協同組合がたがいに理解し、「あらゆる予約のうちでもっとも重要な予約たるプロレタリアート廃絶の予約」を全国にわたって組織する中央委員会を任命することである。 p.114

1849年の末には、ブランが、100余の協同組合の連合から成り、彼の論敵プルドンの「労働相互組織」の思想を実現した「友愛組合同盟」に賛成しているのがみられる。 p.114

総じてわれわれはただブランのうちに、「ユートピア」社会主義の生きた伝統に属する多くの思想を見出すのである。 p.114

クーデター後の多数の協同組合にたいする迫害や解散も、その運動の息の根をとめることはできなかった。それを脅かす真の危険は、ここでもイギリスと同じく、内部から起こった。すなわち資本主義化、資本主義的または半資本主義的組合への漸次的変質がそれであった。 p.115

生産協同組合はまさに「自己の立場だけに立つ」べきではない。それに対して二つの大原則、すなわち完全協同組合における生産及び消費の結合と連合主義とをともに守らなければならない。 p.116

消費協同組合の発展は、数的上昇の直線をたどっている。(中略)これに対して生産協同組合(中略)の発展はジグザクな線であらわされ、全体としてはほとんど上昇の傾向を示していない。 p.116-p.117

新しい組合が絶えず発生してはいるが、そのうちの活動的な組合の多くがたえず資本主義の領域に移り行き、ほとんどいかなる連続性も存在しない。しかし完全協同組合についてはこれと異なるものがある。この発展について語られる場合にも、それは多数の小範囲についてのことであって、これらの間には一般に真の結合は成立していないように見える。 p.117

消費協同組合や生産協同組合の建設は、地域から地域へと広がる包括的な運動から出発した。完全協同組合的な意味での<sup>ジードルンク</sup>移住地の建設はその多くが何か突発的なもの、即興的なもの、効果をもたないものをふくんでいた。前者とは反対にこれに欠けていたのは、フランツ・オッペンハイマーのいわゆる「遠隔作用力」であった。 p.117

\*フランツ・オッペンハイマー (Franz Oppenheimer、1864年3月30日 - 1943年9月30日) は、ドイツにおけるユダヤ系社会学者、政治経済学者。

一般に農業生産協同組合や工業生産協同組合も、断続的でまた増減しながらも連合を結成した。しかし協同組合的な移住地は概して連合しかなかった。その運命はその意志に相反している。それらははじめ孤立を欲しなかったのに孤立した。影響力の多い模範たることを欲したのに、たんに興味ある実験となった。ダイナマイトを装填した社会改革の開始たろうと欲したのに、一つ一つが自己目的となった。

p.117 - p.118

消費協同組合と生産協同組合とは、場所や経営のすべてにおいてほぼ同じような一定の状態から発生した。したがって当初から、その状態を克服するために企てられた実験がたがいに影響しあう芽生えが存在し、したがってまた連合への芽生えも存在した。 p.118

このような計画は、その本質からして一定の地域に、まさに問題が発生した地域に関係する限り、十分な意味において局地的、すなわち地域的とよぶことができよう。異なる地域に同様の問題が存することからしてすぐに連合的団結の可能性が生じ、さらに今日の多くの消費組合連盟のような巨大な組織をも生むことになる。 p.118 - p.119

移住による完全協同組合建設の歴史においては、一般に事情はこれと根本的に異なっている。ここではわれわれは多かれ少なかれ現実の状況から独立し、しかも一定の地域とその要求に対する真の結びつきを欠き、言葉だけで指図し、あたかも空中で計画を立てたあとでそれを地上に引きおろすような思想をくりかえし目にするのである。 p.119

こうした計画たるや、(中略)全く思弁的に発生し、(中略)一定の状況の問題にこたえるものではなく、地域や地域の問題に結びつくことなしに新しい状況を形成することを目ざすものである。 p.119

(心情の共同はおそらく常に生活の共同を建設するには不十分である。それにはもっと深い、人間存在に基づく結合が必要である。) ドグマを忠実に奉ずる移住地は硬直化に脅かされ、硬直化に対する反抗がはげしくなった移住地は分裂に脅かされ、そのいずれにおいても条件や制限にたいする矯正的修正的な洞察力を欠いている。 p.119 - p.120

\*ドグマ： 1 各宗教・宗派独自の教理・教義 2 独断。教条。「ドグマに陥る」 p.119

ドグマが支配するところではただ移住地の孤立しか生まれない。 p.120

しかしドグマが退いたところでもまた、経済的精神的に閉じこもった移住地は、ことに外国では孤立、無連絡および無影響の運命をたどっている。 p.120

もしも強力な生命および運命の大波に支えられた教育の力が、共同体感情と共同体意志につきまとう利己心に対する永続的な勝利を保証し、あるいはむしろそれによって利己心をより高い形態にまで高めることができるならば、こうしたことはすべて決定的ではなかったであろう。しかし普通にはただ集団的利己心、善意の利己心がある程度個人的利己心にかわって現れている。 p.120

そして個人的利己心がときに協同組合の内部的団結を脅かすように、しばしばドグマと混和した集团的利己心は協同組合相互の間や協同組合と一般社会との間に真の共同社会的関係がうち建てられるのを妨げている。 p.120

われわれに知られた移住地建設の企ては、大部分失敗に終わるか、あるいは忘れさられるかした。多くの人びとが考えるのとはちがひ、決して共産主義的なものだけではなかった。このさいもちろんわれわれは、宗教的諸教派の個々の、その生命がただ集団の信仰の力の圏内において、またこの信仰の力の部分的現象としてのみ理解されるような企ては除外しなければならない。特質的なことは、このような企て、このような企てにおいてのみ、(中略)連合的形態が現れたことである。 p.120-p.121

移住地は、まさしくそれが宗教の代用物の燃焼ではなく真の宗教的精神の高揚の表現として発生し、その存在を神の国の開始と見たところでこそ一般にその持続力を実証したのである。 p.121

根本的に重要なのは連合自体であって、集団の相互補足、相互協力、集団の間を流れながら勢を加えて行く共同生活の流れである。だがそれに劣らず重要なのは移住地が、別種の関係であるにせよ、一般社会と何らかの関係を持つことである。——それはたんに余剰の生産のために市場を必要とするからではなく、またクロポトキンも指摘しているが青年が隔離に堪えられないからではなく、むしろ移住地がかの特別の救世的信仰を抱かない限り、本当に生きうるためには、周囲の世界に影響をおよぼさなければならないからである。使命をになう者は、必ずしも言葉をもってではないにせよ、必ずや存在をもってそれを表現することができなければならない。 p.122

真の共同生活はもろもろの機能の縮小や分離ではなく、その充実と相互の働き合いを意味する。しかしそれにはクロポトキンが規定したと見られるように「町みずからをコミュニンにかえる」のでは足りない。もしも町が組成されずに社会的に無定形のままでよく組成された村落連合に相対するならば、町は結局消極的にしか活動せざるをえないであろう。町は村落と真に実りある交渉に入るためには、みずからを編成し、協同組合の一連合体に建てなおさなければならない。現在の計画経済思想のうちにはすでに——大部分は技術上の組織化的考慮から起こっているが——この方向への注目すべき刺戟を見出すことができる。 p.123

最後にわれわれは、社会の構造的更新の視点から、協同組合の三つの主な種類を見ることにしよう。 p.126

◆ 消費協同組合

- ・ 歴史的に見て格段に有勢な種類、すなわち消費協同組合は、本来再建の細胞たるには最も適していない。
- ・ ただ人間存在の些細な、また極めて物質的な領域において、人びとを互いに結合する。
- ・ 消費協同組合がなすことは、消費自体ではなくて、むしろ消費のための購入である。
- ・ 共同購入は、本質上、(中略)何ら重要な要求を加えるものではない。 p.127
- ・ 共同購入は営業となり、その責任が従業員に移るやいなや、人びとを本質的に結びつけることをやめる。

・ 共同体細胞やそれら細胞の複合的有機的構造への結合など問題とはなりえない。 p.127  
「人びとは、いっしょに物を買うために消費者として団結するときは、ただこの一点でのみ互いに接触するに過ぎない。利害の一般的合致は存在しない。・・・特殊化された組合はただ経済的能力を発展させるにすぎない。現在の水準を超える人類の進化は、真の有機的社会を形成し結合する力に無条件にかかっている。」[『国民の存在』 ジョージ・ウィリアム・ラッセル、アイルランド]これこそまさに、私が社会の有機的な構造的更新のもとに理解するところのものである。 p.127 - p.128

◆ 生産協同組合

- ・ 消費協同組合よりもはるかに高度にこの構造的更新に参加し、すなわち新しい構造の細胞として役立つのに適している。 p.128
- ・ 生産者としての人間は消費者としての人間よりも、当然はるかに積極的に仲間といっしょに働く。彼は、仲間とともに生きた社会的統一体を構成する能力においてもまさっている。
- ・ このことはみずから働く者にたいしてとくにあてはまる。それというのは一般に彼は団結によってはじめて強力になるからである。
- ・ ただ問題は、彼がこのチャンス強く意識し、その実践的な見通しを信ずることができるかどうかである。
- ・ だが彼は、われわれがすでに見たように、途中できわめて容易に、ほとんど宿命的に、他人を自己のために働かせようとする傾向におちいる。
- ・ 消費協同組合は、外部的、技術・組織的に資本主義的形態に屈するとすれば、生産協同組合は内部的、すなわち構造的および心理的にそうなるのである。 p.128 - p.129
- ・ しかし小さな有機的単位とその有機的、連合的發展とが構造的更新にたいしてもつ決定的な意義が、生産協同組合による社会の改造に最も熱心な方面においても、いかに少ししか認められていないかをわれわれは二十年前イギリスのギルド社会主義においてみた。 p.129

有機的な構造的更新の原理が決定的となるためには、生産と消費とが結合され、生産では工業が農業によって補足される完全協同組合の影響が必要である。 p.129

完全協同組合がそのまま新しい社会の細胞となるまでには、どれほど長くかかるにしても、それがただちに、相互に結合した磁気的な活動中心の広範な複合体として建設されることが、根本的に重要である。  
p.129

真の、必ずや永続的な内部からの社会の新秩序は、ただ生産者と消費者とのいずれもが独立かつ固有の協力単位として構成する結合——その社会主義的な力と活気とが、総合的な機能において放射的に、仲介的結合的な作用をおよぼすところの多数の完全協同組合によって保証される結合をとおしてのみ達成されることができよう。 p.129 - p.130

だがそれには、これまで百年以上にわたる歳月の間に現れた孤立的な、またその本質全体からして孤立を運命づけられた実験のかわりに、地域的に計画されながら連合体を建設し、ドグマ的固定がなく、多様な社会的形成を互いに認め、しかも常に全体を、新しい有機的な全体を指向するところの包括的な移住地の関連体が出現することが必要である。 p.130



## 8. マルクスと社会の更新

国家を社会に、それも変装した国家ではない「真の」社会に、できるだけ広い範囲にわたってとりかえること、これがいわゆるユートピア社会主義の目標であることをわれわれは知った。 p.131

真の社会の前提は次のように約言することができよう。すなわちそれは内面的につながりのない個々人の集合ではありえない。なぜならばそのような集合は、やはりまたたんに「政治的」原理、すなわち支配と強制の原理によって結合を保ちうるにすぎないからである。 p.131

真の社会は、共同体的な生活を基礎とする小社会と、これら小社会の連合体とから構成されなければならない。そして各小社会の成員相互の関係も小社会と連合体との間の関係も、ともにできるだけ広範囲に社会的原理、すなわち内面的つながり、協力および互助の原理によって規定されなければならない。いかえれば、構造的に豊かな社会のみが国家の後を継ぐことができるであろう。 p.131

このような目標は、その本質からして、支配秩序の変改すなわち権力手段を行使する機能を有するものを取りかえるだけでも、また所有秩序の変改すなわち生産手段を駆使する機能を有する人びとを取りかえるだけでも、なおまた社会生活の形態を外部から規制する法律や制度を変更するだけでも、さらにこれらをすべていっしょに行うことによっても達成されることはできない。 p.131 – p.132

これらすべては変革のある段階では必要とされるが、それはもちろん、真の社会の生成にとって基本的な、欠くことのできない自発性、内部からの形成、したがってまた多様性の諸要素を発生せしめないような、全体を統一的に規定するいかなる強制秩序もそれから生じないという条件の下においてのことである。 p.133

本質的なことは、まさに真の社会そのものの建設が、一部はすでに存在しながら形態と意義とを更新しつつある社会から、一部は新たに形成せらるべき社会からなされることである。 p.132

かの経済的および政治的秩序の変革は、社会主義実現のために欠くことのできない障碍の排除を意味しはするが、それ以下でもなければそれ以上でもない。経済的および政治秩序の変革なしには、社会主義実現は観念、刺戟、また孤立的実験たるにとどまる。しかし、社会構造の実際的更新なくしては、秩序の変革は母屋のない間口でしかありえない。とはいえいかなる場合にも秩序の変革が時間的に先立ち、構造的更新はその後につづくものと見るべきではない。 p.132 – p.133

みずからを改革する社会は、おそらくそれを成就するためにまた防衛や障碍排除のために必要な機関をつくりだすことができるであろう。しかし変更された権力関係は、権力原理を克服しうるような新しい社会をつくりだしはしない。 p.133

「ユートピア」社会主義にとって協同組合は自己目的ではないし、そこで広範囲な社会主義の実現がな

されたときもそうである。問題はむしろ新しい秩序によって解放され、その権利が確立され、多様なものの統一にまで結成せらるべき実質を建設することである。 p.133

「ユートピア」社会主義はある特殊の意味で局地的社会主義とよぶことができる。それは「非地域的」ではなく、むしろ時々と与えられた場所でまた与えられた条件の下に、したがって「ここでも」、ここでも可能な限度において実現されるであろう。 p.133

しかし局地的実現は、「ユートピア」社会主義にとっては出発点、「端緒」以外のものではなく、より大規模な実現が結びつくために存在しなければならないもの、この実現が自由と勢力を闘いとるために存在しなければならないもの、新しい社会がそれからすなわちあらゆる細胞とそれら細胞に似た姿で成立しているものことから建設されるために存在しなければならないものでしかない。 p.133 - p.134

マルクスは、社会主義にたいする最初の定式づけからその思想の十分な円熟にいたるまで、「ユートピア」社会主義にきわめて近い仕方での目標を理解していた。 p.134

弁証法の定式は、マルクスの見解によれば実際の出来事から何かが継起するかについてなんら疑の余地を残さない。すなわち一方において社会革命の政治的行動は、たんに階級国家だけでなく、さらに権力組織としての国家一般を抹殺するが、これにたいして、政治革命はまさに国家をまず「一般公務として、すなわち真の国家として建設」する。他方においては組織化の活動すなわち社会の再建は、現存権力の完全な崩壊ののちに初めて開始する。——革命に先立って行われる組織化の活動といえ、闘争の組織でしかなかった。 p.135

ここですでにわれわれは、マルクスを「ユートピア」社会主義に結びつけるところのもの、すなわち政治的原理を社会的原理にとり代えようとする意志と、彼をそれから引きはなすところのもの、すなわちこのとり代えが専らに政治的な手段によって、したがっていわば政治的原理の純然たる自殺の方途においてなしとげられるとする見解とを、きわめて明瞭に見てとることができる。 p.135 - p.136

だがここでわれわれが最も感心するのは次の点、すなわちそのような一国もしくは数ヶ国で一定の見解が支配し、しかも実際に現在のあらゆる技術的な権力手段を用いて支配している間は、社会主義の実現、社会主義的社会形態の成立に欠くことのできないかの自発性、かの自由な社会形態の探求と形成が、いかにして存在しうるであろうかという点である。 p.137

本来的な意味の権力と非本来的な意味の権力との間にはっきりした境界線を引かなかったことによってマルクスは、彼の見解によれば存在しないし、また存在しえないところの政治的原理の一変種、すなわち階級支配の表現および完成ではなくて、むしろ階級によって特質づけられない集団および個人の権力傾向や権力闘争の表現及び完成であるところの変種に門戸を開いている。したがって非本来的な意味の政治権力はプロレタリア階級の内部、あるいはもっと正確には「階級支配が廃止された」全人口の内部における敵対関係の公的要約となるであろう。1848年の問題の多い革命からの印象は、構造的更新の企てに

たいするマルクスの批判的態度を厳しくした。 p.138

しかし協同組合制度は、大衆を解放するためには、「全国的規模への発展、したがって国家的手段による助成」を、それ故まさにルイ・ブランやラサールが望みかつ努力したことを必要とする。しかしこうしたことは大土地所有者や資本から進んで承認されはしないであろう。「だから」政権を獲得することが、いまや「労働階級の大きな義務」である。ひとはこの、「だから」という言葉に十分注意しなければならない。 p.139

ここには、それとなくではあるが、マルクスの思想における国家的中央集権主義の底流がまぎれもなく表明されている。 p.140

彼[マルクス]が攻撃するブルードンの連合主義は、決してすべてをコミューンに分解しようとするものではなく、むしろ現存のコミューンに比較的広い範囲の自治を与え、それらコミューンをして連合体を結成せしめ、それら連合体の結合をもって現代の国家よりも有機的な形態の自治共同体たらしめようというのである。これに反してマルクスはここでもまた国家そのものに固くしがみついている。

p.140 – p.141

[パリ・]コミューンがマルクスの眼にとって従前のあらゆる企図から区別されるところのもの、「その真の秘密」は、それが「本質的に労働者階級の政府」であったことである。(中略)すなわちマルクスはたんに労働者階級によって任命されるのだけでなく、さらに実際に労働者階級によって執行される政府を考えている。コミューンは、「生産者の自治」である。 p.141

「コミューン制度は、社会に寄生し、社会の自由な活動を阻害する『国家』という規制的無用物が、これまで食いつくしてきたすべての力を社会の体に返したであろう。このただ一つの行為によって、それはフランスの再生を開始させたであろう。」マルクスがここで語っているのは、一定の歴史的な国家形態ではなくて国家一般についてであることは明白である。地方自治が「自明的なもの」となることによって、国家権力は「無用なものにされる」のである。 p.142

しかしコミューンの政治的構造は、マルクスにとっては、単に本来的かつ決定的な事柄、すなわちもしコミューンが絶滅されなかったならば、その傾向および計画からして不可避免的に到達したにちがいない大々的な社会転換への序曲にすぎない。 p.142 – p.143

したがって、コミューンおよび協同組合の連合主義——これこそはまさに彼が描くところのものである——がマルクスに真の共産主義として認められているわけである。 p.143

なるほど彼[マルクス]はいまも「ユートピア主義」には顔をそむけている。労働者階級は「国民決議によって導入すべきいかなる固定的なユートピアをももたない。労働者階級が新しい自治共同体と新しい社会にまで築きあげようとするコミューンおよび協同組合の制度は、考案され作成されるのではない。労

働者階級は、新旧両世代の結合の現実、国民協同体自身のうちに漸次に成立する現実、そしてこの現実からのみその事業、その住居を建設することができる。「労働者階級は実現すべきいかなる理想ももたない。彼らはただ、崩壊しつつあるブルジョア社会の胎内ですでに発展した新しい社会の諸要素を解放すればよい。」 p.143-144

そして崩壊しつつある旧社会の胎内に発展した「新しい社会の諸要素」の主なものは、まさしくフランスで「ユートピア」社会主義の影響の下に建設されたかの協同組合なのである。——このことは、マルクスが描いたコミューンの政治的連合主義がプルードンの影響の下に形成されたことと軌を一にする。これら協同組合こそは、『共産党宣言』で「小さな、当然失敗に終わる実験」とされたものであった。 p.144

だが実際には思慮ある反強権的社会主義者の何人も、革命が強権の肥大とその過剰を除去することをもって口火を切り、その後では時々の与えられた事情に応じて強権を縮小すること以外には何も要求しなかったのである。エンゲルスは彼[反強権主義者]のいわゆる挑戦にこたえていっている。「紳士諸君、諸君はいつか革命を見たことがありますか。革命こそはおよそ最も強権的な事柄なんですよ。」 p.145 – p.146

だがもしも、いつ終わるかもわからない革命期を通じてすべての人びとが、思想および生活のあらゆる領域にわたって中央の強権的意志に無制限に規定されるべきことを意味するのであれば、かくの如き段階から、どのようにして社会主義に進む途が通じるのかは不可解である。 p.146

こんごの研究によって、マルクスは、いま多くの人びとが考えるほど誤っていないこと、また財政政策にしてもなんら新しい社会形態を創造したのではなく、むしろ古いものを利用したにすぎなかったことが、(今日いくつかの重要な研究が指摘しているように)立証されるであろうと思われる。 p.149 – p.150

マルクスは、革命前におけるコミューンの望ましい方向への発展の可能なことを「理論的には」肯定したが、実際にはその「救出」を時機をえた革命の到来に依存せしめた。ここでも、他の個所におけると同様に、明らかに政治的契機、すなわち建設的な活動によって革命の勢いとその力を奪われはしないかという懸念が決定的である。 p.153

マルクスは、テンニースが語っているように、存命中すでに一つの神託、しかもその解答が多義的であるためにしばしばうかがいをたてても無駄な神託であった。 p.153

「そのときなお中央集権化のために残る」わずかな機能は、コミューンの役員の手に移されるであろうとマルクスがいうとき、その意味は明白である。すなわちできるだけ多くの国家機能が地方分散化され、集中化されたままで残らなくてはならない機能も管理的なものに変わり、しかもそれが不定の期間継続する革命後の発展の後ではなく、革命行動のさ中において行われ、かくして、エンゲルスの有名なエルフルト綱領批判によれば、「1792年から1798年にかけてフランスのあらゆる県、あらゆる市町村が有した」ところのもの、すなわち「完全な自治」を実現するというのである。それにもかかわらずレーニンはまだ

がっていない。マルクスが根本においてはつねに中央集権主義者であったことにかわりないからである。マルクスにとってコミューンは本質上政治的単位であり、革命闘争の機関なのである。 p.154 - p.155

公的生活に関する三つの思考様式、すなわち経済的、社会的および政治的思考様式のうち、マルクスは第一のものは方法的熟達をもって駆使し、第三のものには熱情的に没頭したが、社会的思考には——マルクス主義者の耳にはまったくばかげたことに聞こえるかもしれないが——稀にしか親しまなかったしまた決して彼にとって決定的なものとはならなかったのである。 p.156 - p.157

マルクスもエンゲルスも、実際には決定的な問題である構造的更新の諸要素についての問題にたいして、いち度として積極的な解答を与えなかった。彼らは構造的更新の理念になんら内面的な関係をもたなかったからである。 p.157

[マルクスやエンゲルスにとって]革命の政治的活動こそは依然本質的にただ一つの努力すべき事柄であり、革命の政治的準備——はじめは直接の後には議会および労働組合での準備——がただ一つの本質的課題であり、それとともに政治的原理が最高の決定的原理となった。そして現に形成されつつある、もしくは新たに形成すべき構造的更新の諸要素にたいする実践的態度について具体的な決定を行う場合、それはただ時々の政治的効果の見地から行われた。 p.157

社会主義運動は大規模な宣伝や指令の力をもってその周囲にプロレタリアートを集め、政治および経済の領域において攻撃と防衛に大きな闘争力を発揮した。しかし社会主義が究極的にはそのために宣伝し計画し闘ったところのもの、すなわち新しい社会形態の生成は、その意識の本当の対象でもなければ、その活動の本当の目標でもなかった。 p.160

マルクスがパリ・コミューンを賞揚していったことをマルクス主義運動は望みもしなければ実行もしなかった。マルクス主義運動は、新しい社会の現存する前提的形態に留意しなかったし、新たに生起しあるいは形成されようとしている企てを支援し、それに影響を加え、それを指導し、整理し、その連合を結成することには熱心に努力しなかった。 p.160 - p.161

それは生きた共同社会の一つ一つの細胞、一つ一つの細胞結合を生み出すことにみずから一貫した働きをなさなかった。マルクス主義運動は、その強大な勢力にもかかわらず、革命によって解放せらるべき人間の新しい社会的存在を形成することに着手していないのである。 p.161

## 9. レーニンと社会の更新

内部からの、細胞組織の更新による社会更新の原理は、その理念自体から生ずる確固たる地位をなんらマルクスの教説においては見出さなかったのであるが、このことは、この教説を実現しようとする今日の大きな企て、意識的な人間意志の、驚嘆に値するけれども深刻な問題を含むこの努力においても同様である。 p.162

しかし革命後の時期については双方[マルクスの教説、この教説を実現しようとする今日の大きな企て]の場合、社会再生に対応する社会形態を企画することは、ユートピア的であると説明されている。 p.162

しかしそのような幻想像は実際的には益することがないにしても、人びとが行動をもって追及する方向がその人の抱く理念によって指し示される事実は極めて重要である。 p.162 - p.163

社会主義の理念は、マルクスにおいてもまたレーニンにおいても、共同の生活と共同の労働によって内面的に結ばれた小さな諸社会とそれら小社会の連合とから成る新社会の有機的建設を目指している。しかるにマルクスにおいてもレーニンにおいても、それが明確かつ統一的な行動方針とはなっていない。両者ともに、再建の分散主義的要素が革命政略の中央集権主義的要素におしのけられている。 p.163

そこに欠けているのは、その集中化された行動からの要求とそれを害せず可能な分散化された社会を形成する仕事との間に、思想の実践が要求するものと思想自体が要求するものとの間に、革命政略の要求と生成する社会主義的生活の権利との間に、時々境界線を引くことである。 p.163

決定はつねに、マルクスにおいては運動のための理論と指令のほうに、レーニンにおいては革命の実践と国家および経済の再編成の方に、本質的には政治のため、すなわち中央集権主義のために下されている。 p.163

しかしそこには何よりも、われわれがマルクス及びエンゲルスに見出し、そしてレーニンおよびスターリンに伝わるどころのある思想および傾向が表明されていた。すなわちそこから唯一の確実なテーゼと唯一の標準的な指令とが発せられる教説および行動の絶対的な一中枢、別の言葉でいえば「プロレタリアートの独裁」によっておおわれたこの中枢の独裁という思想と、生成しつつある社会主義的自治共同体の分権化の必要を犠牲にして中央集権主義的的革命政治を永久化しようとする傾向とである。

p.163 - p.164

一方の社会的原理による政治的原理の廃棄に対するマルクスの要求と、他方の政治的原理の実際上の継続的支配との間に生ずる矛盾は、革命がまだ完成されていないと見ることが正しいと感じられることによっておおいかくされている。 p.164

ここに、またもほかならぬ唯物史論そのものによっておおいかくされた問題がひそんでいる。 p.164

他の見解の社会主義が活動している間は、まさしく革命は終局にいたっていないのであるし、またよし組織化の活動がすでにはじまっているにしても、政治的原理はまだ社会的原理によって解消されることはできない。「非本来の意味の」政治権力はその中央集権的要求において、「本来の意味」の政治権力がそうであったよりも、いっそう包括的に、無慈悲に、「全体主義的」になることが可能である。

p.164 – p.165

しかし彼[レーニン]の思想と意志を支配していたのは、マルクスおよびエンゲルスにおけると同じように革命政治の動機であって、それは、分散化された共同体生活を求める生きた社会的動機をおしつぶし、かくしてこの社会的動機はただ挿話的にしか働きえなかったのである。 p.165

実際歴史の上で、いかに小さな規模のものにもせよ、その[社会主義によって国家が死滅し始めた]例証としてあげることのできるいかなる実例も存在しない。これを世界史上はじめて実現するためには、人びとは力強い、理念に燃えた精力を分権化へ傾注しなければならなかったであろう。こうしたことは何もなされなかったのである。 p.165 – p.166

社会革命後における国家の「死滅」説は、マルクスのとくに用心深い暗示からエンゲルスが作り上げたものである。 p.166

1891 年にはエンゲルスはさらに、しかもそれ以上の後退は必要でもまた可能でもないほどに後退して、次のようにいっている。階級支配にたいする闘争において勝利をおさめたプロレタリアートは、「新しい自由な社会状態において成長した世代が国家というがらくたをすべて棄て去ることができるようになるまでには」、国家の「最悪な面」を「できるだけ速やかに切とら」ざるをえないであろう。 p.167

もはやプロレタリアートが生産手段の国有化とともに国家としての国家を廃止するというのではなく、むしろプロレタリアートははじめに、まだ「新しい世代」が成長するまでは、ただ国家の最悪な面を切り棄てるにとどまることになる。 p.168

しかしエンゲルスがそれらの歴史的経験にかくも深く影響されたのは、彼にもまたマルクスにも、社会の構造的更新や国家廃止の準備を目指す統一的に一貫した理念の方針や分権化の活動への強い確固たる意志がなかった事実によるのである。レーニンが相続したのは、分裂した精神的遺産、すなわち社会主義的生命力を欠く社会主義的革命政略であった。 p.168

だが、コミューンの歴史的経験は、まさに、熱情的な革命家たちの心情に、分権化され、広範囲に非国家化された社会の像が生きており、それを彼らが現実に変化しようと企てたことによって可能となったのである。まさしく、パリ・コミューンの精神的父祖たちは、マルクスやエンゲルスがもたなかったところの、かの分権化を目指す理念の方針を抱いていた。1871 年の革命の指導者たちは、不十分な権力手段をもってではあったけれども、革命のさ中にその理念の実現を開始しようと企てたのである。 p.169 –

行動の本来的問題をレーニンは弁証法の定式で簡単に片づけている。「国家が存在する間はいかなる自由も存在しない。自由が存在するときには、もはやいかなる国家も存在しないであろう。」ここでは弁証法が本質的な課題、すなわち今日実現することが可能であり、また実現してしかるべき自由の最大限がいかなるものであるか、今日なおどれほど「国家」が必要であるかを日々吟味し、そしてたえず実際の結論を引き出すという課題をおおいかくしている。 p.170

人間がいまのままである間は、おそらく全くの自由など決して存在しないであろうし、まさにその間は「国家」すなわち強制が存在するであろう。しかし問題は日常のことである。すなわち国家が必要避くべからざる限度以上でなく、自由が許される限度以下ではないことが問題なのである。そして自由とは社会的に見れば、何よりも共同社会への自由、国家の強制から独立した共同社会への自由を意味するのである。 p.170

権力は、対抗権力が強要しない限り、退きはしない。 p.171

だが、人間的現実<sup>そうおう</sup>に相応する課題としてはむしろすべての管理機能を時々可能な限り広範囲に非政治化すること、すなわちこれら機能が権力の集積に変質する可能性をとりさることであろう。もはや管理者だけが存在し、いかなる被管理者も存在しないことが問題なのではない。——[レーニンの考えを批判して]これこそどんなユートピアにもましてユートピア的である。——問題はむしろ管理がどこまでも管理としてとどまり、それが支配にならないこと、もっと正確に言えば、管理が時々<sup>時々</sup>の事情によって無条件に必要とされる(その決定はもちろん支配者自身の仕事ではありえない)以上の支配的要素を取りいれないことである。 p.171 - p.172

たしかにレーニンは、ある根本的な変革が「すぐに」行われることを欲した。 p.172

この根本的な変化は、他の変化とはちがって、発展にまかせらるべきではなく、革命行動自体のうちに、しかもその決定的に重要な行為としてふくまれるのである。すぐに「新しい、測り知られぬほど高い、くべるもののないほど民主的なタイプの国家装置」が形成せらるべきである。 p.172 - p.173

かくしてレーニンはこの点で社会構造を直接改変することを必要と考えた。このような改変なしには、いくら重大な干渉を加え、いくら新しい制度、新しい法律、新しい権力関係をうちたてても、依然公的生活の中心ではすべてが旧態のままであることを彼は理解していた。 p.173

その晩年にはレーニン自身の口から次の痛烈なことばが語られている。「われわれは官僚制的ユートピアとなってしまった。」 p.173

レーニンにとって歴史から引きだされる決定的なことは、人類がこれまでにソヴェトよりも高級の優秀

な政府形態を作り出せなかったという確信だけであった。それ故ソヴェトは「全生活自体をその手中に握ら」なければならなかった。 p.177

\*ソヴェト(労働者評議会)は、ロシア革命時のロシア帝国において、社会主義者の働きかけもありながら、主として自然発生的に形成された労働者・農民・兵士の評議会(理事会)。もしくはそれらの(建前ないし名目上の)後継組織であるソビエト連邦の議会。

むしろレーニンがソヴェトが本質上分権的組織であることを見誤りはしなかった。(中略)自治制度の設立と強化にたいしては革命政治の目標以外にいかなる目標も与えられていない。自らの力で自治を実現することは、すなわち「革命を押し進める」ことなのである。 p.177

「われわれは中央集権主義者でなければならない。しかしわれわれの任務が地方に移される時も存在する。われわれは一つ一つの場所に最大限の創意をまかせなければならない。・・・われわれの党のみが革命を真に押し進める合図を与えるのである。」[レーニン] p.178

真に社会主義的な態度なら、「われわれは中央集権主義者でなければならない。だが・・・時も存在する。」という合言葉の代わりに、それと逆の合言葉をかかげたであろう。「われわれは地方分権主義者、連合主義者、自治主義者でなければならない。だが、革命行動の要求から、主たる任務が中央に移される時も存在する。しかしわれわれは革命行動の要求がその実質的および時間的な限界を越えないように注意しなければならない」と。 p.178-p.179

レーニンは疑もなくあらゆる時代を通じて最も偉大な革命戦略家の一人である。主として彼の問題点に決着をつけるのは、マルクスにとって革命の政略がそうであったように、彼にとって革命の戦略が行動だけでなくさらに思想の最高法則となっていたことである。これこそは彼の成功の基をなしたといえるであろう。彼の成功がついに社会主義の成功にならなかったのは、マルクスにおけると同じく彼においても心のより深い層に根ざしていた中央集権主義とともに、これに責任があることは確かである。 p.179-p.180

レーニンについて私が力説したいのはむしろ、いかなる原則的中央集権主義も、直接の革命行動をこえてのかかる国家[ソヴェトが権力を掌握するときに成立する国家]権力の存立とは両立しえないことにたいする洞察を欠いた点である。 p.180

レーニンはこの論文[『国家と革命』]で初めて、ソヴェトに基本的重要性を認める種々の動機をあげている。 p.183

- (1) この「新しい国家装置」は、常備軍の代わりに赤衛軍を設けることによって人民自身に武力を与える。
- (2) 「新しい国家装置」は指導者と大衆との間に解きがたいほど緊密な、「コントロールし易い」結合を確立する。

- (3) それは被選挙資格と解任の原則によって官僚制を排除する。
- (4) 新しい国家装置がつくり出す様々な職業(中略)との接触を通して最も重要な諸改革を行い易くする。
- (5) 大衆を引きあげ、教育するところの前衛を組織する。
- (6) 立法機能と行政機能を結合することによって議会主義の長所と直接民主制の長所とを結び合わせる。

ここでまっ先にあげられるのは、革命の権力政略であり、第二番目には改革の組織が、第三番目には国家の形態がおかれている。社会構造の改変にたいするソヴェトの可能な重要性の問題などは、提起されてもいない。 p.183

レーニンが初めて歴史的人物となったこの二ヶ年の間に、ソヴェトは現実について何を吟味し、何を反省したにせよ、ソヴェトは依然彼にとっては革命目的のための手段であった。 p.184 - p.185

たんにソヴェトが革命のために存在するのではなく、さらに——しかもより深い第一義的な意味で——革命がソヴェトのために存在することになるかも知れないというようなことは、彼の念頭には浮かばなかった。この点から——といっても私が考えているのは個人としてのレーニンではなく、彼のうちに典型的に示されている精神の性質と傾向とである——ソヴェトが現実においてもまた観念としても忘れられて行った理由が理解されよう。 p.185

たしかにわれわれは、1918年3月の党大会でレーニンが、「官僚制なく警察なく、常備軍なき」新国家についての考えをくりかえし述べているのを聞くけれども、彼はなおこうつけ加えている。「ロシアではそれはほとんどはじまったばかりであり、しかも下手にはじまったのだ。」その責任が十分な計画の不十分な実施にあると考えるのは、大きな誤りであろう。計画自体が生きた実質を欠いていた。「わがソヴェトには」と彼は説明している。「なお多くの粗雑なもの、不完全なものが存在している。」しかし本当に運命的でもあった事柄は、たんに政治的であるだけでなくさらに精神的でもある指導が、ソヴェトに発展と完成とへの方向をさし示さなかったことである。 p.186 - p.187

「コミューンをつくった当の同じ人びとが」とレーニンはつづける、「コミューンを理解していなかった。」これは、ロシア帰国の翌日彼が、「われわれはソヴェトを理解していなかった」といったことを思い起こさせる。だが彼は今もソヴェトを本当には「理解し」なかったし、また理解しようとしなかったといった方が事実である。 p.187

「われわれは社会主義の特性など言明することはできない。社会主義が、その究極の形態をとるとき、どのようなものになるか、われわれはそれを知らないし、また語ることもできない。」[レーニン]これは疑いもなくマルクス主義的な考え方である。だが、まさしくここに、現に生成しつつある、もしくは生成しようとしている現実にたいするマルクス主義的世界観の限界が、歴史的な明白さにおいて示されている。すなわち潜在的な物事、それが発展するためには社会的形態観念からの促進を必要とするところの物事が知られていないのである。 p.187

われわれはもちろん社会主義がどのようなものになるかを「知る」ことなどできない。しかし社会主義がどのようなものになることをわれわれが欲しているかは知ることができる。そしてこのような知識、このような意志、このような意識的意志はそれ自体同時に生成に影響する。 p.187-p.188

——人が中央集権主義者であれば、その中央集権主義が同時に生成に影響する。歴史のうちには、その勢力関係は異なるにせよ、常に中央集権主義的發展傾向と地方分権主義的發展傾向とが並存している。そこに生ずる結果にとって本質的に重要なことは、意識的意志がその時々を獲得した力をもって、これら二つの傾向のいずれに味方にするかを宣明することである。—— p.188

そして権力を与えられた意志が中央集権主義から解放されること以上に困難な、また稀有<sup>けう</sup>なことはおそらくあるまい。中央集権主義的意志が、みずから利用する社会構成体のうちに潜在するところの地方分権主義的諸要素を認めまいとすること以上に当然な、また論理的なことがあるか。 p.188

「社会主義を建設する煉瓦はまだつくられていない」とレーニンはいっている。レーニンは、その中央集権主義の故に、ソヴェトがその煉瓦であることを知りまた認めることができなかった。彼はソヴェトがそうなるように助成できなかつたし、また現にソヴェトはそうならなかつたのである。 p.188

これら民族的及び社会的構成体はすべてただ政治的、戦略的、戦術的および暫時的な有効性をもつにすぎない。どれ一つとして真の存在権、独立の構造的価値を与えられていない。どれ一つとして生成される自治共同体の生きた分枝として、また追及する未来のために保存され育成されることになっていない。 p.189

1922年末、第四回コミュニスト・インターナショナル大会で行った報告『ロシア革命の五ヶ年と世界革命の展望』で、レーニンは率直に「われわれは古い国家装置を引きついだ」といっている。彼は数年にしてこの装置を根底から変えることに成功するであろうという確信をもって自分を慰めている。このレーニンの希望は実現されなかつたし、またレーニンの前提からすれば実現さるべくもなかつたであろう。彼は主として新しい力の養成と結集とを考えていた。しかし問題は構造上のことであつて、人間の問題ではなかつた。 p.190

レーニンの真の幻滅は官僚制の不変な存続であつた。官僚制は、人員においてはそうでないにしても、その頑強かつ客観的な活動力においては革命原理よりも強力であることが再び立証された。彼はこの現象のより深い原因にはふれていないようである。 p.191

十月革命は、社会秩序および社会成層、社会形態および制度に決定的な変化を実現したという意味でのみ、社会革命であつた。しかし真の社会革命はそれだけではなく、さらに国家に対抗して社会の権利を確立しなければならない。 p.191

しかしそれにしても、たえず事態の変化に応じ、時々許された程度において、社会的原理の勢力範囲を拡大する方針を実際に立てることは可能であった。起ったことはまさにその逆である。政治的原理の代表者たち、すなわち主として支配の地位について「職業的革命家たち」は、彼らの無制限な決定領域を猜忌さいきの念をもって保持した。 p.192

\*猜忌：ねたましく思っけきらうこと。

しかし指導的地位にとりたてられた人びとはまさにその精神の奥底までも政治的原理の烙印を押されていた。彼らは国家的実質の要素となり、社会的実質の要素ではなくなった。そして、このような変化に反対なものもその考えを主張することができないか、あるいは主張しようとしなくなった。 p.192

「プロレタリアートの独裁」は事実上社会にたいする国家の独裁、依然この方途に社会革命の完成を期待する圧倒的多数の人民が賛成もしくは甘受するところの独裁である。レーニンにとってまさに廃止することが問題であったために、彼の悩みであった官僚主義——「コムニオン国家」は彼にとって全く非官僚制国家であった——は、政治的原理の独占的支配に必然的に伴う現象でしかないのである。 p.193

現在のロシアでは、資本主義時代の残存物は別としても、なお二つの階級すなわち農民階級と労働者階級とが残存することになった。したがって完成した共産主義がすべての農民を労働者に変えてしまわない間は、レーニンの意見によると、経済の自治など考慮されないわけである。言葉を変えて言えば、(共産主義の完成は国家死滅の達成と合致するのであるから)国家の内部的権力領域の原則的縮小は、国家が最後の息をひきとる前には考えられないこととなる。このパラドックスこそは、ソヴェト制度の指導における実際の行動原則である。この点から見るときはじめて、協同組合制度にたいするレーニンの態度の変化が全体として理解されるのである。 p.193 - 194

こうしたことはすべての政治革命にはあてはまるかも知れないが、しかし歴史上初めてかくも大規模に社会的変革の要素がつけ加わったときには、人類すなわち事件の当事的たる国民とともにその目撃者たる諸国民が、あらゆる実験と動揺のうちにも未来の明らかな告知を、社会主義的現存すなわち自由な共同社会への動きについての明らかな告知を知ろうと渴望するものであることを彼[レーニン]は見落とした。ロシア革命においては、他にかつて未聞の何事かが起ったにしても、この種のことは出現しなかった。そしてさらに協同組合にたいするレーニンの態度の変化は、そうした動きが起らなかったことの証左である。 p.194

なるほど資本主義社会における小島のような協同組合は、彼[レーニン]がいうように「一店舗」たるにすぎないけれども、私的資本が廃止されたのち、社会全体を包括する協同組合は「社会主義」であり、したがってすべての市民を例外なく全般的な国営協同組合、「単一の大協同組合」の組合員たらしめることが、ソヴェトの任務だからである。だがそれによって協同組合の原理が一切の独立した内容とさらに原理としての存在性をも失い、無意味なものとなし、名称の下に必然的に中央集権的官僚主義的な国家制度以

外に何も残らなくなることについては全く語らなかった。(中略)すべての協同組合が消費協同組合の指導の下に併合され、消費協同組合は全く国営物資配給所に変えられた。 p.195 – p.196

その本質全体からして社会的分散化の胚種であり核心であるところの[協同組合]制度が、それと同時に、「社会主義的」と銘うつ新しい隙間のない国家中央集権主義建設の要素たるべきものとされた。その際レーニンが、理論的前提からではなく、実際的要求から出発していることは明白であって、その実際的要求は周知のようにきわめて重大なものであり、またそれは非常な努力を必要とした。 p.196

そして次のように結論する。「協同組合の単なる発展もわれわれには社会主義の発展と同じように重要である。」そればかりか、「完全な協同組合化の条件の下では、すでにわれわれは両足で社会主義の地面に立つものである。」彼[レーニン]は、計画中の全包括的な国営協同組合のうちに、「ロバート・オウエンとともに始まった」古くからの協同組合の「夢」を見ているのである。ここで理念と現実との間の矛盾が最高点に達する。 p.199

ロバート・オウエンとともに始まる「ユートピスト」たちが、彼らの組合思想や計画について問題にしたことは、生活と労働とを共にする小さな独立的単位への人々の自発的な結合とそれら単位の諸共同体の共同体への自発的結集とであった。レーニンがかかる思想および計画の実現と示しているのは、これと全く逆のものであり、国営生産所と国営配給所の巨大な、嚴重に中央集権化された複合体、たがいに歯車のようにかみ合わされ、官僚制的に管理された生産および消費の機関から成るメカニズムである。自発性や自由な統合などもはや存在する余地がなく、それを夢見る可能性すらもない。——夢の「実現」とともに彼は夢見ることをやめた。 p.199 – p.200

彼[レーニン]は、あらゆる領域に中央集権主義の縮小をもたらし、その絶頂に達していたところの運動に決定的な理論的基礎を与えようと欲した。しかし彼はこの運動の土台中の土台たる自由の原理を与えなかった。——そしてそれは彼の一連の思想からすれば必然的なことであった。 p.200

類似は単に表面的なものでしかない。レーニンはいまも協同組合を自発的な、独立した、内面動因からまた自己の法則にしたがって発展する構成体としては片時も考えなかった。国民を一つの統一的な、献身的意志をもって彼にしたがう全体にまで形成するためのあらゆる困難な努力の後で、「官僚制の瘤」と病気の徴候や死の接近についてのあらゆる失望幻滅の後で、いま彼が熱望したことは、結合されるべくもない二つのもの、すべてにおおいかぶさる国家と血気さかんな協同組合、すなわち強制と自由とを結び合わせることであった。 p.200 – p.201

人間歴史のあらゆる時代を通じて、つねに協同組合とその原型は国家とその原型の有効権力が残しておく隙間すきまにおいてのみ真に発展することができた。隙間のない国家はその本質上協同組合の現実の発展を排除するのである。 p.201

レーニンの最後の理念は、協同組合が、ただ機能上国家から区別され、実質的には国家と合致するよう

に、その範囲を拡大し、その構成を統一することであった。それはとうてい不可能なことである。 p.201

上述のことは、いかにソヴェト制度が実際に当面の中央集権化と相対的に分権化された領域の一時的許容との間をくりかえし動揺したか、しかしマルクスによって定式づけられたかの社会主義の目標、すなわち「政治的外皮の脱離」への方向をもっていささかもその行動の格率とはしなかったかを示すに十分であろう。 p.202 – p.203

格率／格律 : イマヌエル・カントによって提唱された哲学用語。

1785年に著された *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten* では「格率」とは自分の持つ行為規則と定義された。この格率の普遍化が可能であったならば自分は道徳的であるということになる。そして普遍化可能な格率はそれが法則として成り立ち、それは全員がその法則に従うという形で秩序が形成されると考えられるような行為規則である。

古い農村ロシアは、メイナードが正しく述べているように、1929年まで存在した。それが伝統的農耕方式といっしょに抹殺されたことは、経済的能率の視点から肯定されるにすぎない。社会構造の視点からするならば、問題は一般に別の形で提起されなければならない。この視点から見ると、問題はあれかこれかであることは許されない。なすべき任務は、現存の構造単位を新しい条件と要求とに対応しうるように改変し、しかもそのさい、構造的な性格、独立の細胞としての本質を維持することであった。こうした任務は遂行されなかった。 p.205

だが、農業を工業の一部門とし、農民をこの工業の賃金労働者たらしめようという政治的動機に発する傾向、すべてを包括し、すべてを規制する国家経済を目指す傾向、農業協同組合をたんに完全コミュンへの過渡的段階とし、完全コミュンをたんに全体的国家工場の農業部門の地域的分岐への過渡的段階とみなす傾向、それらの傾向は村落共同体の固有の価値、構造的価値を窒息させたし、また窒息させざるをえなかった。 p.206

人は、個々の有機体の場合と同じように、社会有機体においても、それを余すところなくかつ全能の力をもって目的のための手段として利用するとき、その生命の神髄を奪い去らざるをえないのである。 p.206

人は杖につくってしまった小木から葉が出ることもはや当然に期待できない。 p.206

ロシアの民衆の間には、他のいずれの国におけるよりも久しい前から、共同作業のために小さな組を結成する「中世的」傾向が維持されてきた。この傾向から生まれた最も独特な社会構成体すなわちアルテルについて、クロポトキンが40年前に、それがロシア農民生活の本来の実質をなしていること、すなわち漁民や漁師、職人や小商人、運送人やシベリア流刑者、織工や大工として町へ働きに行く農民、農村において共同で、ただし共同所有と個人所有とを厳密にわけて、耕作や畜産に従事する農民等の、一部は永続的な一部は一時的な、結集をなしていることを語る事ができた。ここに構造的再建の偉大な理念によって他に類のないほど価値のある構造的要素が存在したのである。 p.206

最も優秀な農業理論家の一人はその目標をこう規定した。土地の耕作は、と彼はいった、国家経済がすべての農業アルテルにとって代わり、土地、生産手段および家畜もまた中央集権国家の所有に帰するとき、初めて社会化されたと見なされるであろう。そのとき農民は、国家の賃銀労働者として共同家屋に、広く電化された市域の中心たる大農業都市に居住することになるであろう。このような観念を一部に含む願望像は、決定的にかつ残りなく非構造化された社会の像である。それどころかそれは社会を食い尽くした国家の像である。 p.207

ソヴェト制度は、経済的技術的には大きな成果をあげたし、戦争技術的には一層大きなことを成しとげた。市民は概して種々の理由からこの制度を消極的または積極的に、擬制的または、現実的に肯定しているように見える。彼らの態度のうちには、見たところ、漠然とした諦めと实际的信頼とがいりまじっている。個人は思想と行動のわずかな自由しか保証しないこの制度に自己をまかせている、と一般にはおそろしくいうことができるであろう。 p.207

しかしソヴェト制度が社会主義について実現したことを、囚われない眼で見る者には、これとちがった光景が見えてくる。社会主義への要請は多いけれども、社会主義の形態は皆無なのである。 p.207

「共産党宣言が語るかの『組合』はどのように見えるのか」と偉大な社会学者マックス・ウェーバーは1918年に質問した。「社会主義は、ひとたび権力を奪取し、それをいまや意のままに駆使するチャンスを実際に掌握したとき、社会主義社会の胚種細胞としてとくに示す何をもっているのか。」このチャンスが社会主義の手に入った農村では、今日もはや他のいかなる場所にも存在しないところの胚種細胞が存在していたのに、それは成長せしめられなかったのである。 p.207 – p.208

それにしてもなお転回と変化の時機は存在する。——ただしそれはレーニンや彼の協力者がしばしば実行したような戦術的意味のものではなく、原則的意味のことである。逆戻りすることはできない、ただ前方に——しかも新しい方向に前進しうるのみである。突然に出現してこの変化を成就するような名もない力がなお奥深く活動しているかどうか、それにこそ多くのことがかかっている。 p.208

社会主義という言葉を最初に用いたピエール・ルルー(サン・シモン派社会主義者 1797–1871)は、1848年フランスの国民議会で次のように演説した。「諸君がいかなる<sup>ゲノツケンシヤフト</sup>人間的組合をも欲しないならば、あえて言うが、諸君は文明を恐ろしい苦悶のうちに死滅すべき運命にさらしているのである。」 p.208

## 10. もう一つの実験

高度資本主義の時代は、すでに見たように、社会の構造を破壊した。 p.209

資本主義に先立つ社会は種々の社会から組み立てられており、それは複合的多元的な構成体であった。これによってその社会は、特殊の社会的活力を与えられ、革命前の中央集権国家の全体主義的傾向に抵抗することが可能となり、その多くの要素が自治的生活をはなはだしく弱められたときにもなおそうであった。 p.209

結社の固有権に反対するフランス革命の政策はこの抵抗を打ちこわした。それ以降新しい高度資本主義的中央集権主義は、古い中央集権主義がなしえなかったこと、すなわち社会を原子化することに成功した。 p.209

機械およびその助けをえて社会を支配する資本は個々の人間のみを相手にしようとし、また近代国家は自治的集団生活をますます横奪することによってこれを援助した。 p.209

プロレタリアートが資本に対抗して建設した闘争組織、経済的組織である労働組合および政治的組織である政党は、その本質上この解体過程をはばむことはできない。なぜならば、それらは社会自体の生活およびその基礎たる生産と消費になんらの通路をもたないからである。 p.209

資本の国有への転移もまたなんらの構造的更新を招来しえないし、この転移が、真の自治生活を欠き、またそれ自体新しい社会主義社会の細胞とはなりえないような強制的協同組合の網を確立するときにも、同様である。 p.209 - 210

このことからして、協同組合運動の客観的真髓は、社会の構造的更新への、新しい構造学的形態における内部的関連の奪還への、新しい consociatio consociationum(諸組合の組合)への傾向として認められるべきである。この傾向がその初期には時おりロマンチックな回想やユートピア的な幻想と結びついていたという理由で、それをロマンチックなもしくはユートピア的なものと見ることは、先に私が説明したように、根本的に誤りである。それは根本において全く局地的でありまた建設的である。すなわちそれは与えられた条件のもとで与えられた手段をもって達成しうる改革を考えるのである。 p.210

そして心理的にはそれは、たとえ多くの場合抑圧され、それどころか麻痺せしめられているにしても、人間の永遠の欲求に、すなわち人間がそこでくつろぎ、共に住む人びとが彼との出会い、彼との協働のうちに彼の固有の本質と生活を確認するところのより広大な建物のなかの一つの部屋として自己の住居を感じたいという欲求に根ざしている。 p.210

共通の見解と共同の努力のみに基づく結合は、この欲求を満足せざることはできない。それは、共同の生活が築きあげる結合のみに可能である。 p.210

こうしたことについての意識から、総合的な形態すなわち完全協同組合が求められてくる。その最も有力な試みは生産と消費との結合の上に共同生活が建設される共同体村落である。そのさいわれわれは生産のもとに農作業だけでなく、さらに農業と工業および手工業との有機的結合をも理解しなければならない。 p.211

過去 150 年の間に、ヨーロッパおよびアメリカで、共産主義的なものであれ狭義の協同組織的なものであれ、この種の共同村的移住地を建設しようと企てた種々の試みは、おおむね失敗した。失敗したと私がいうのは、たんに多少のちがいはあれ短命な存続の後で全く崩壊したり、あるいは資本主義的秩序をとりいれ、それによって全く反対の陣営に移ったりしたかの移住地の企てだけについてのことではない。むしろ孤立するにいたったものをもそれに数えている。それというのは、新しい村落共同体の本来の構造更新的な課題はそれらの<sup>2</sup>連合とともに、すなわちその内部構造を支配するものと同じ原則の下での互いの団結とともに<sup>3</sup>はじまるからである。ほとんどどこでもそこまでには<sup>4</sup>いたっていない。 p.211

社会主義の課題は、新しい村落、種々の生産形態を結合し、生産と消費とを結びつける村落が、無定形化された都市社会に構造的更新の意味での影響をおよぼす程度に応じてはじめて実現されるであろう。そうした影響は、より以上の技術的発達<sup>5</sup>が工業生産の分散化を可能にし、さらにそれを要求するときまたはその限りにおいて十分に作用することができるであろう。しかし現在の協同組合的村落にもまた、都市社会に働きかけることのできる放射的な力がすでに潜んでいる。 p.212

都市を破壊しようとする<sup>6</sup>ことなどは、かつて機械を破壊しようとしたことがそうであったように、ロマンチックであり、ユートピア的であろう。しかし都市を技術の発達との密接な関連の下に有機的に組成し、小単位の集合に変えることは建設的であり局地的である。今日すでに多くの国々で重要な意味をもつその芽生えが存在するのである。 p.212

私が過去の歴史と現在とを見わたした限りでは、完全協同組合を創設しようとしたただ一つの包括的な企てに、社会主義的意味におけるある程度の成功を認めることができよう。それはパレスチナにおけるユダヤ人の種々の形態の協同組合村である。この協同組合村にもたしかに内部の関係、連合および一般社会に対する影響という三つの領域すべてにおいて深刻な問題が<sup>7</sup>つきまどってきた。しかしそれは、そしてそれだけが、これら三つの領域にわたって<sup>8</sup>生きた存在であることを示した。 p.212 - p.213

協同組合的移住地の歴史において他のどこにも、一定の人びとの範囲に対応した形態の共同生活へのこのように<sup>9</sup>倦むことのない探求、このようにたえず更新される試み、放棄、批判、新たな試み、同じ幹から、同じ形成衝動からのたえず新たに生ずる<sup>10</sup>分枝は存在しない。また自己の問題にたいするこのような監視、問題との不断の対決、問題を検討しようとするこの強い意志、言葉で外部に表わされてはいないが問題克服のためのこのようにたえ間のない格闘は、他のどこにも存在しない。 p.213

ここに、またここだけに、生成し行く自覚的な共同体器官が発生した。この器官は敏感の余りたえず絶望

に陥られるけれども、それはより高い希望、すなわち絶望の土上にのみ成長し、またもはや感情ではなくしてただ働くことを意味するより高い希望をかきたてるため、感情的な希望をうちこわすところの絶望である。それ故、ごく穏当な概観と考察からしても、地球上のこの一地点で、あらゆる部分的失敗にもかかわらず、一つの失敗していない企てを認めることができるというよいであろう。——そして現にそれは模範的な失敗していない企てとなっているのである。 p.213

個々人のゆるい集合ではその本質からして与えられた条件の下では成し遂げえないこと、それどころかそうした条件の下では本質上試みえないこと、それをこの集団は敢行し、試み、成就したのである。 p.214

たがいわゆるイデオロギー——私は古いけれどもすたれない理想という言葉でよぶ方を好むが——は、たんに後からつけ加えられる何か、つくりあげられた事実を根拠づける何かではない。パレスチナの最初のコミュニオンを建設した人びとの精神には、時の要求に理念的な動機、折々にロシアのアテルの記憶、いわゆるユートピア社会主義者たちの書物を読んだの印象および社会正義に関する聖書の教えのほとんど意識されていない影響が独特にまじり合った動機が結びついていた。 p.214

決定的なことは、この理念的な動機がゆるやかで柔軟な性格をほとんど例外なく保持したことである。多くの様々な将来への夢も存在した。人びとは前途に新しい包括的な家族形態を見た。人びとはみずからを労働運動の前衛、それどころか社会主義の直接の実現者、新しい社会の原型と見た。人びとは新しい人間と新しい世界の形成を目標とした。 p.214 – p.215

しかしこれらのうちどれ一つとして固い出来上がった綱領に硬化されはしなかった。人びとは、協同組合的移住地の歴史ではどこでもそうであったように、具体的な事情によって変更することは許されないで、ただ記入するだけでしかないような図式を持参しなかった。理想は刺戟を与えたが、いかなるドグマをも生み出さなかった。それは鼓舞激励はしたが、命令はしなかった。 p.215

何よりも重要なのは(中略)パレスチナの事態の背後に一つの歴史的事情(中略)が存在したことであり、またこの歴史的事情が、あらゆる階級のなかから「ハルツィーム」すなわち開拓者たるエリートを呼び集め、そして階級を超越させたことである。このエリートに適した生活形態が共同体村なのであった。 p.215

この共同体村は、中心の「開拓者的」課題を果たすのに最も適した形態であり、また同時に社会的な生活理想が民族的観念を実際に吹きこむことのできる形態であった。歴史的諸前提からしても、これらエリートと彼らのこうした生活形態にとって、静止と孤立のうちにおちいることは内面的に不可能であることが明らかとなった。彼らの任務、彼らの仕事、彼らの開拓者的精神によって彼らは魅力と影響の中心になった。「開拓者精神」はあらゆる点で新しい変革されて民族共同体の生成に関連付けられた。それは、自己満足におちいるやいなや、自らの精神を放棄したであろう。 p.215 – p.216

民衆の生活、とりわけ歴史的危機のうちに立つ民衆の生活においては、そこに真の、すなわち中心的な職能に召された、非篡奪的なエリートが出現しているかどうか、次にこれらエリートが社会に対する自己

の使命を忠実に守り、社会にたいする関係の代わりに自己自身にたいする関係をうち立てないかどうか、さいごに彼らとその使命にふさわしい仕方<sup>で</sup>補充され、更新されていくことができるかどうか、こうしたことこそは決定的な意味をもつのである。 p.217

すなわちエリートがその後に自然につづくものに強く影響することができ、かくして後進者は、どんな困難な問題であっても、エリートの仕事を適切につづけて行くかどうか、またできるだけすべての適格な分子が加わり、それ以外の者はできるだけ加わらないような正しい選抜と正しい訓練とによって精神的後継者を立てるか、あるいは不適格者の参加がさけられない場合には正しい教育的な影響によって調整がなされるかどうかということである。 p.217

共同体の全責任を引き受けている人びととどこかで責任を回避している人びととの間の内的緊張は、最も奥深いところからのみ克服されることができる。 p.217 – p.218

問題が起こる点は、理念にたいする関係でもなければ社会にたいする関係でもなく、また労働にたいする関係でもない。こうした点ではどこでも、半開拓者たちもまた自制し、全力を尽くし期待されたことを大体実行した。問題が持ちあがる点、人びとが「つまづく」点は、仲間との関係である。 p.218

私が考えているのは、共同体の大きさとはいく関係のないことである。親密さが問題ではない。——親密さはあるところにはあるし、ないところにはない。問題は開放性にある。真の共同体は、たえずいっしょに歩きまわる人びとから成ることを要しない。それは、まさに同志として互いのために心をうち開けその用意をしている人びとから成立しなければならない。その存在のあらゆる点において潜在的に共同体の性格をもつものが真の共同体である。 p.218

かくして共同体の内部の社会的内部的問題は実際にはその純粋性、したがってまたその内的力とその持続性との問題である。パレスチナにユダヤ人の共同体村を建設した人びとはこのことを深い本能から感知していた。 p.218

だがわれわれはこのきわめて重要な領域についてもまた、私がすでに指摘したあの容赦なく明敏な集団的自己観察と自己批判を見出すのである。しかしそれを正しく理解し評価するためには、人びとがかれらの共同体村の最も内的な固有の本質にたいしていただく比類なく積極的な、まさしく信仰的な関係といっしょに見なければならぬ。両者は同一の精神世界の二つの側面であり、どちらも他を欠いては理解されないのである。 p.218 – p.219

パレスチナにおけるユダヤ人の共同体的移住地の失敗しない原因を描き出すため、私はその成立の非教義的性格をまず述べることにした。この性格は共同体村の発展をもまた本質的に規定した。たえず新しい形態や中間的形態が全く自由に分れ、そのどれもが特殊の社会的および精神的欲求の発展から生れ、成立の当初からしてすでに自己のイデオロギーを全く自由に取得した。どれもが勧誘し増殖し拡大し、大なり小なりの領分を建設したが、すべては全く自由に行われた。 p.219

種々の形態の代表者が、それぞれ自己の形態のためにいいたいことをいい、各形態の長所短所はたがいに率直にまた辛辣に論議されるが、しかしそれはすべての人びとに自明的と感じられている地盤、すなわちそれに基づいて各形態が他の形態の特殊な機能における相対的な資格を認めるところの共通の問題と共通の任務との地盤に立ってのことである。こうしたことはすべての協同組合的移住地の歴史において独特のものである。それだけでなく、私の見る限りでは、社会主義運動の歴史においても、ここほど、分化の過程のさ中に統合の原則を守ることが慎重に考えられたことは、他のどこにもなかったのである。

p.219

かくして広い世界でのあらゆる社会的実験とは本質的に異なるものが生まれた。それは、各自が自己の問題と計画とをもってそれぞれ自己のために研究する実験室ではなく、共同の土地で様々な方法による様々な栽培が共同の目標に向かってたがいに試されている実験畑なのである。

p.220

クヅツアは、その最初の未分化な形態においてすでに連合への、より上の社会単位への各クヅツアの結合の傾向をもっていた。

p.221

様々な形態、家計や生活秩序や子供の教育に個人的な独立性を保持する半個人主義的形態から、純共産主義的形態にいたる様々な形態の分離や発展とともに、一つの団結に代わって一連の諸団結が成立し、それぞれにおいて一定の集落形態と多かれ少なかれ一定に人間タイプが互いに連合を結成し、そのさい各地域的グループが、個々のグループのなかで行われているのと同じ共同性と相互扶助の原則のもとに結合することが基本的前提であった。しかし包括的統一への傾向も決して消滅しなかった。

p.221

各部分集団がその団結のなかで自己の特性づくりあげかつ強めた。そしてそれぞれが統一を自己の拡大と考えるように傾いたのは当然のことではない。

p.222

しかしこれになお、こうした分離的団結の態度をいちじるしく高めたもの、すなわち政治化がつけ加えられる。二十年前にはまだある大きな団体の指導者はこう強調することができた。「われわれは共同体であって政党ではない。」これはその後根本的に変わり、そしてそれに応じて統一の条件も本質的にいっそう困難となった。このことからまた、社会の構造的更新にとって基本的に重要な近隣関係が、よし大いに発展した豊かな村が他の団体に属する近隣の貧しい青年にたくさんの援助をあたえた実例が少くないにしても、十分にうち建てられないという遺憾な事実が生じた。

p.222

統一はおそらく、それを不可欠とする新しい事態による以外には結成されないであろう。しかし、ヘブライ共同体村の人びとが *communitas communitatum* (諸共同体の共同体)生成のため、すなわち構造的に更新された社会の生成のため、互いに対抗し、また協力しながら努力してきたことは、人類更新への努力の歴史において忘れられることはないであろう。

p.222 - p.223

このようなテンポで、このような後退と幻滅と新たな冒険とをもってこそ、人類の世界に真の変革が達

成されるのである。 p.223

だが一定の前提と条件の下での企てがひとたびある程度成功したならば、ひとは他の、それほど好都合でない前提と条件の下でも、その企てを変えて着手することができるのである。 p.223

最近の戦争を世界危機への序曲の終わりに見ねばならぬことにはもはやほとんど疑問の余地はない。  
p.223

それらはただちに根本的な社会化の必要、とりわけ土地収用の必要に直面するであろう。そのとき、誰が変革された経済の真の主体となり、社会的生産手段の持ち主となるか、最高度に中央集権化された国家の中央権力か、それとも共同に生活し共同に生産する農村および都市の労働者とその代表団体との社会単位か、これが全く決定的に重要となるであろう。この後者の場合には改造された国家機関はただ調整と管理の機能を営むだけになるであろう。より大きな国でも後で次第にこれにならうであろう。この決定にこそ、新しい社会と新しい文化との生成が広くかかっている。 p.224

次の原則についての決定が問題なのである。すなわち諸連合の連合としての社会の構造的更新と国家の統一機能の縮小か、それとも全能国家による無定形社会の吸収か、社会主義的多元主義か、それとも「社会主義的」中央集権主義か、変化する条件によって日々新たに吟味される集団的自由と全体秩序との正しい釣合か、それともいわゆる「ひとりでに」やってくる自由の領域のために不定期間強いられる絶対的秩序か。 p.224

ロシアが自ら本質的な内部的変革を経ない間は——そしてわれわれはいまなおそれがいつまたどのように起こるかを知りえないのである——その時選択すべき社会主義の二つの極の一つをわれわれはモスクワという強力な名で示さなければならない。もう一つの極を私はあえて「エルサレム」と名づけるのである。 p.224

## 11. 世界危機のさ中で

ここ三十年来われわれは、人類史上最大の危機の発端に生活していることを感じている。近年の驚くべきもろもろの出来事もまたこの危機の兆候としてのみ理解されうるものが、われわれにいよいよ明らかになっている。 p.225

それは決してたんに、他のいく分かはずで準備されたシステムによってとりかえられる経済的および社会的システムの危機ではない。すべてのシステムが、古いものも新しいものもひとしくこの危機の中にまきこまれている。 p.225

危機をとおして問われているのは、まさしく世界における人間の存在一般に他ならない。 p.225

われわれに測り知られぬ遠い昔に、「人間」という被造物が旅にのぼった。——それは、自然から見れば全くほとんど理解できない異常事であり、精神から見れば同じように理解しがたい、おそらくはただ一回的な化身であり、これら二つの面からみても、その本質からしてあらゆる瞬間に外からも内からもきわめて強烈に脅かされ、いよいよ深刻さを加える危機にさらされている存在である。 p.225

この世の旅をつづける間に人間は、いうところの自然を支配する力なるものをいよいよ多く、またいよいよ速いテンポで高め、またいうところの精神の創造なるものを勝利から勝利へと導いた。しかしそれと同時に人間は、相次ぐ危機によって一切の栄光がいかにもろいものであるかをいよいよ深く感ずるようになり、また最もよく先が見える時には、人類の進歩とよびなれているすべての事柄にもかかわらず、人間は平坦な道をたどっているのでは全くなく、つねに深淵の間の狭い尾根を一步一步歩んで行かなければならぬことを理解するようになった。 p.225 – p.226

危機が重大になればなるほど、いっそう真剣な、いっそう責任を自覚した認識がわれわれに要求されるのである。なぜならば、たしかに行動が問題ではあるけれども、認識のうちに浄化された行動のみが、危機の克服に寄与するであろうからである。 p.226

人間がいつかだいに自然から抜け出し、また自然的存在としての弱さにもかかわらず、自然にたいして自己を主張するにいたったゆえんのとりわけ本質的な事柄、しかも特別に作られた事物から「技術的」世界を形成したことにもまして本質的な事柄は、人間が防御や狩猟、食糧採取や労働のために仲間と団結したことであり、しかもそのさいある程度は最初からすでにその後はますます多くの度合いにおいて他の一人一人を独立の存在として認め、そのようにして互いに理解し合い、語りかけたり話しかけられたりしたことである。 p.226

互いに同時に依存しかつ独立する人々からのこのような「社会的」世界の形成こそは、動物における類似のあらゆる営みとは類を異にし、それはちょうど人間の技術的労働が動物における類似のあらゆる動きとは類を異にするのと同じである。 p.226 – p.227

多くの昆虫もまた厳密に分業的に建設された社会をなして生活をしている。(中略)そこには臨機の処置やごく僅かな度合いにもせよ相互の独立や、つねに互いに「自由に」観察する能力や、したがって人間対人間の如き関係は存在しない。 p.227

人間特有の技術的創造が事物に独立性を与えることを意味するように、人間特有の社会的創造は人間の存在に独立性を与えることを意味する。この人間のみ特性からこそ、あらゆる上下の曲折を含む人間の行路も、またそれとともにその途上におけるわれわれ自身の現代の地点やわれわれの特殊の大きな危機も理解されるべきである。 p.227

人類自体のこれまでの発展においてもこの進路、すなわち増大しゆく個人的独立とこれを基礎とする相互的認知および協力とからなる共同社会の形成および改造への進路が有力に行われている。人間的社会へのこの途上において初期の人間がなしとげた二つの最も重要な歩みは、ある程度確認することができる。 p.227 - P.228

それ以来、真の人間的社会が発展したところではどこでも、それ[重要な歩み]は機能的独立、相互的尊重、および相互的責任——個人的および集団的な——という同じ基礎の上に生じた。 p.228

なるほど共同の秩序と安全を組織化し保証する様々な種類の権力中心が分立した。しかし狭い意味の政治的領域すなわちその警察権力と官僚機構を備えた国家にたいしては、有機的機能的に組成された社会、多種多様の諸社会から構成された社会が対立しており、この社会の中で人々は生活し生産し、また相争ったり助け合ったりした。この社会を構成する大小様々な社会の一つ一つのなかで、これら共同体および協同組合の一つ一つのなかで人間個人はあらゆる困難や争いにもかかわらず、氏族におけるのと同じように、自己の固有の機能的独立と責任が認められ確認されることを感じたのである。 p.228

このことは、中央集権主義の政治的原理が、分権主義の社会的原理を従属せしめる度合につれて変化した。そのさい決定的なことは、国家とくに多かれ少かれ全体主義的な形態の国家が自由な結合をますます弱め押しのかたことではなく、むしろ政治的原理がその中央集権主義の極印をもって自由な結合のなかに侵入し、その構造および内部生活を一変し、かくして社会そのものをますます政治化したことである。このようにして社会が国家に同化されることを要求したのは、秩序づけられた混乱をともなう現在の経済発展や、原料獲得および世界市場への地歩拡大のための万人の万人に対する闘争の結果として、国家間の古い対立に代わって社会自身の間の対立が出現したという事情である。 p.228 - p.229

もはやたんに隣人の侵略心によってではなく、さらに一般事態によっても脅威を感じている個々の社会は、集中化された権力の原理に完全に屈従する以外にいかなる救いをも知らない。この原理を自己の原理となしている点では、民主主義的形態の社会においても全体主義的形態の社会におけるとさして異なるところはない。いたるところで問題とされたのは、ただ隙間のない力の組織、スローガンへの疑いのない信従、全社会による現実的もしくは想像上の国家的利益の遂行であった。 p.229

ただ確実に機能する経済・国家装置によってたんにうわべをおおいかくしている現代生活の大きな混乱のなかにあつて、個人は集合体にしがみついている。個人が身を埋めていた小さな共同体は彼を助けることができない。彼の考えではそれができるのは大きな集合体だけである。 p.229

個人はあまりにも喜んで個人的責任を取り上げさせる。彼はただ服従しようとする。そしてそのために最も貴重な善たる人間と人間との間の生活が失われる。自律的な関係は無意味なものとなり、人格的關係は干からび、精神自体も一職員として雇用される。人間個人は共同社会の身体の生きた部分から「集合体」という機械の歯車となる。人間は、変質した技術のなかで労作の感情と節度の感情をまさに失おうとしているが、それと同様に、変質した社会生活において共同社会の感情を失おうとし、しかもまさに一方では自己の共同社会への全き献身のうちに生活しているという幻想にみたされている。 p.229 - p.230

この種の危機に人間がうち勝つことができるのは、その旅路の初めの地点にもどることによってではなく、ただ与えられた問題を割引せず<sup>に</sup>解決することによってである。われわれには逆戻りはなく、ただつき抜けることしかない。たがわれわれは自分たちがどこへ行こうと欲しているかを知るときのみ、つき抜けることができるであろう。 p.230

明らかにわれわれは、社会的原理に対する政治的原理の主権を奪い取るところの生きた平和を確立することから、はじめなければならない。そしてこの第一の目標は、いかなる政治的組織の考案によっても達せられないし、ただ地球全土を地域と原料と人口に応じて共同で耕作し管理しようという人類の強固な意志によってのみ達せられるのである。 p.230

ところがまさにこの点で、従前のあらゆる危機にまさる大きな危険、すなわちすべての自由な共同社会を食いつくすところの無制限な全世界的権力集中主義がさし迫っている。すべては、全世界を経営管理する仕事を政治的原理にゆだねないことにかかっている。 p.230 - p.231

共同経済は社会主義的経済としてのみ可能である。 p.231

この問題の本来の意義は、社会主義自体についての問題、すなわちそれが成立するあかつきに、人類の共同経済がそのしるしのもとに成立するであろうところの社会主義がいかなるものであるかという問題のうちに存するのである。用いられる概念のあいまいさはここで他のどこよりもはなはだしい。 p.231

だが代表とは何であろうか。結局、現代社会の最悪の欠陥は、まさに、人びとがあまりにも広範囲に自己を代表にまかせていることに存しないであろうか。そして「社会主義」社会では、そこではじめてほとんど無制限の代表が、またそれとともについにはほとんどが無制限な中央権力の集積が支配するように、政治的代表に経済的代表がつけ加えられはしないであろうか。 p.231

しかし多数の人びとが彼らの共同の物事の決定にあたってみずからを代表されるにまかせ、しかも外部から代表されるにまかせることが多ければ多いほど、彼らのうちに存する共同体生活はいよいよ僅かに

なり、共同体性はいよいよ乏しくなるのである。なぜならば、共同社会——原始的なものではなくわれわれ現代人に可能なまた適合した共同社会——はまず最初に、共同の物事にたいする共同の積極的な処理のうちに現れ、それなしには成立しえないからである。 p.231 – p.232

あらゆる歴史の根源的希望は真の、従って全的に共同体的な内容を含む人類共同社会を旨ざしている。共に住みあるいは共に働らく大小諸集団の現実の共同生活とそれら相互の関係とから成立していない共同社会の如きは虚構であり見せかけであり、途方もなく大きな虚偽であろう。 p.232

内部的な決定的問題は原則的なあれかこれかの形のものではない。それは、正しいたえず引き直される限界線の問題、必然的に中央集権化すべき領域と自由にまかすべき領域、支配の度合と自治の度合、統一的な法と共同社会の要求との間に様々な限界線を設定する方式の問題である。中央権力の暴圧にたえずさらされている時々の事態にたいし共同社会の要求からする不断の検討、変化しつつある歴史的前提につれて変わる真の限界にたいする監視、これが人類の精神的良心の任務であり、比類なき最高審であり、生きた理念の誠実な代表であろう。プラトンの「守護者」は、ここで新しい化身を持っているのである。 p.232 – p.233

理念の代表と私はいったが、それは固定した原理の代表ではなく、まさにこの地上の日常の材料において形づくられることを欲している生きた形態の代表のことである。また共同体はドグマ化されてはならない。またそれは、出現するときには概念ではなく状況を満足さすべきである。 p.233

共同体理念の実現は、他の理念の実現と同様に、一回限りに、かつ普遍的妥当的に行われるのではなく、つねにただ現下の問題にたいする現下の解答として行われなければならない。 p.233

この生きた意義をもつために、共同体思想から一切の感傷性、一切の極端化および狂熱を遠ざけなければならない。共同体は決して気分ではない。またそれは感情である場合にもつねに心構えの感情である。 p.233

共同体は、つましい「計算」や逆う「偶然事」や襲いかかる「不安」を知りかつ内に含むところの共同生活の内的心構えである。それは困苦の共同でありまたそれ故にこそはじめて精神の共同である。それは努力の共同でありまたそれ故にこそはじめて救済の共同である。 p.233

また精神を彼らの主とよび、救済を彼らの約束の地とよぶところのかの共同体すなわち「宗教的」共同体は、みずからがえらんだのではなく、むしろそこへまさしくつかわされたところの現実、えらばれもほめたたえられもされないあるがままの現実において彼らの主に仕えるときにのみ共同体である。それは、この道もない時代の藪を通してその約束の地に向って道を拓くときにのみ共同体である。たしかに「仕事」が重要なのではない。重要なのは信仰からの仕事である。信仰の共同体は、仕事の共同体であるときにのみ真実のものである。 p.233 – 234

たしかに共同体の真の本質は、それが一つの中心をもつという——顕在もしくは潜在の——事実に

見出されるべきである。たしかに共同体の真の成立は、その成員が中心に対して共通の、他のあらゆる関係に優越する関係を有することから理解されるべきである。(中略)そして中心の本源性は、それが神的なものの中に明示されたものとして認められないときには、おそらく知ることができない。しかし、この中心は、それがより現世的に、より人間的に、より愛着的に示されていればいるほど、より真実であり、より明瞭である。 p.234

「社会的なもの」もこの中心の一つである。それはその部分としてではなく、確証の世界としてである。すなわちこの世界にこそ中心の真理が示されるのである。 p.234

初期のキリスト教徒たちは、現世と並存する、もしくは現世を超越する共同体に満足しなかった。そして彼らは、神とともにある以外にいかなる共同体をも、またいかなる煩わしい世界をもはやもつまいとして荒野に赴いた。だが神は人間が神とのみあることを欲しないことを彼らに示した。かくして孤独の聖なる無力をこえて友愛の教団が生起した。 p.234

だが共同体は決して「建設」されることを要しない。歴史的運命が一群の人びとを共同の自然および生活の環境においた処、そこが真に共同体が生成する場所であった。そして市民が、言葉にいい表わせないものの周りに、またそれを通して結びつけられていることを知っていたときには、中央に都市の神のいかなる祭壇をも必要としなかった。生きたそしてたえず更新される共同生活がすでに行われており、それはただあらゆる関係の直接性のうちにさらに完成されることを欲した。 p.235

共同体の問題は共同で——最も好都合な場合には代表者によってではなく広場での集会において——協議され決定された。そして公共の事柄について経験された結合がそれぞれの個人的接触のうちに放射した。隔離の危険も脅かしはしたであろう。しかし精神はその危険をはらいのけた。精神はここでは他のいかなる場所にまして旺盛であり、民衆、人類、宇宙を目ざしてその大きな窓を狭い壁に切り開いたのである。 p.235

現代の都市にはいかなる公会場もないし、また現代の人間は彼の選んだ代表者が代わりにやってくれる事柄を討議する時間もない。具体的な共同生活はすでに量の圧力と組織の形態とによってぶちこわされている。 p.235

芸術よりも労働が、政治よりもスポーツが人びとを相互に結びつけており、日時も精神もきちんと分割されている。だがそうした結合はまさに実質的であり、人びとは共通の利益や傾向にいっしょにしたがい、「直接性」にはなにの用もない。集合体はなんらうちとけたいっしょの集まりではなく、むしろ経済的および政治的な力の大きな結合である。それはロマンチックな想像の働きには不毛であるけれども、数量的にとらえることができ、活動や作用として外に現れる。個人は親密さを欠きながらもその精力を尽くしての貢献を意識してこれに所属しなければならない。この不可避的な発展に反抗するいかなる「団結」も消滅せざるをえない。 p.235 - p.236

なるほど、家族共同体としてある程度の共同生活を要求した保証するかに見える家族がなお存在して

はいる。しかしその家族とてもそれが陥っている危機からは目的結合として出現するか、それとも消滅するかどちらかであろう。 p.236

正しい確認(前提)と不合理な結論とのこの混交に直面しながらも私は共同体<sup>ゲマインデ</sup>の再生を信ずるものである。回復ではなく再生を。共同体は事実上回復さるべくもない。 p.236

よし貸長屋での近隣どうしの間のあらゆるささやかな助け合い、最高度に合理化された工場の休憩時間における新しい交わりのあらゆる高まりが、世界の共同体的内容の増大を意味するかに思われるとしても、また時には正しく建設された村落共同体が議会にもまさる現実的なものとして私の心を引くことがあるとしても、共同体は回復さるべくもない。 p.236

しかしさし迫る社会変革の流れと精神とから共同体の再生が生起するかどうか。それによって人類の運命が決定されるように私には思われる。有機的な自治共同体<sup>ゲマインゲメーゼン</sup>——そしてこれのみが形態づけられ組成された人類に適合することができるであろう——は、決して個人からではなく、ただ小さな、またもっとも小さな共同体から建設されるであろう。民族は、共同体的内容を含む度合において共同体である。 p.236 – p.237

共同体の再生を語るとき、私の念頭にあるのは、恒常的世界状態ではなくて、変革された世界状態である。新しい共同体<sup>ゲマインデ</sup>——ひとはこれを新しい協同体<sup>ゲメッセンシャフト</sup>ともよぶことができよう——によって私が考えるのは、変革された経済の主体すなわちその手に生産手段の機能が移される集合体である。くりかえしていえば、すべては、そのような集合体が準備されているか、また準備されるであろうかどうかにかかっている。 p.237

新しい共同体にどれだけの経済的および政治的自主性——なぜならば共同体は必然的に同時に経済的ならびに政治的単位であろうから——が認められるであろうかは、たえず提起され解答されるべき技術的問題であるけれども、それはまた、共同体内部の権力状況はその外部の権力状況に依存するという、超技術的な認識からも提起され解決されるべき問題である。 p.237

中央集権主義と地方分権化との関係は、さきにも述べたように、原理的に処理される問題ではなく、理念と現実との関係に関するすべての問題と同じように、多くの精神的機敏、正しい振合についてのつねにやっかいな考慮をもって処理されるべき問題である。しかし中央集権化は、時と所の条件によって必要とされる限度でのみ行われるべきである。その境界線を引いたり引きなおしたりする当事者が良心に目ざめているならば、権力ピラミッドの土台と頂点との関係は、みずから共産主義を称し、すなわちやはり共同社会を目指して努力していると称する諸国家において今日行われているのとは全くちがったものとなるであろう。 p.237 – p.238

私の考えている社会形態においてもまた代表制は存在しなければならないであろう。しかしそれは今日の制度のように、無定形な選挙民大衆の偽りの代表者ではなく、共同体の経営管理においてその手腕をよく試された代表者から成るであろう。被代表者は彼らの代表者と、今日のように空虚な抽象、政党綱領

の独特の用語によってではなく、具体的に、共同の活動と共同の経験とによって結びついているであろう。 p.238

だがもっとも本質的なことは、共同体建設の過程が、共同体相互の関係にも一貫しなければならないことである。もろもろの共同体から成る共同体のみが、自治共同体の名に値するのである。 p.238

私がここに急いで素描した像の略図は、暴風雨がそれを開くまで、「ユートピア社会主義」の文書に積み重ねられたままにおかれるであろう。私は、新しい社会形態のマルクスの「孵化」を信じないと同じように、革命の胎内からのバクーニンの処女受胎をも信じない。しかし私は造形の時機における像と技倆ぎりょうとの出会いを信じている。 p.238

## 訳注

- (7) 「アナキズム思想の最近の偉大な代表者」(エリッヒ・フロム)、「精神的巨人」(ルドルフ・ロッカー)、「ドイツ革命のもっとも立派な人物、最も偉大な精神の一人」(エルンスト・トルラー)などとよばれるグスターフ・ランダウアー(1870-1919年)のことは、日本ではほとんど知られていないように思われるが、しかも彼はブーバーの親しい友人であり、また本書でもわかるように思想的にも深いつながりがあるので、少し詳しく紹介したい。

ランダウアーは南西ドイツでユダヤ系中産階級に生まれた。学生時代社会民主党に加わったが、1891年異論派の青年たちとともに追放された。このグループがベルリンで発刊した週刊「デル・ゾチアリスト」は、ランダウアーの編集の下にやがてアナキズム宣伝紙に変じた。その後、ランダウアーはアナキストとして国際的舞台に活動するとともに、1908年自ら「社会主義同盟」を結成して実際運動にしたがった。(中略)5月1日夜逮捕されたランダウアーは翌朝監獄の庭に引きだされた。軍人の群れに「獣の如く」惨殺されたという。(中略)ランダウアーはこのように活動的な革命家として生涯を過ごしたが、一面はおよそ政治家というには遠く、むしろ学者であった。(中略)マルクス主義に対しては「時代のペスト、社会主義運動の呪い」という烈しい言葉で斥けている。(中略)また、ブーバーのランダウアー追悼の一文(1929年)によると、ブーバーは1919年当時その身边におったようであるが、その文章はこう結んでいる。「ランダウアーは革命のなかで革命のために革命に反対して闘った。革命はこのことで彼に感謝しないであろう。しかし彼と同じように闘った人々はかれに感謝するであろうし、またおそらくいつかは、彼がそのために闘った人々も彼に感謝するであろう。」 p.240 - 242

- (8) ランダウアーの思想の一端を知るための参考として、この「社会主義同盟」規約の他の条文をあげることにしよう。
1. 社会主義とはあたらしい社会の建設を意味する。
  2. 社会主義社会は、個人の自由な結合から成るところの、自主的に経営し、相互に公正に交換を行う共同体の連合体である。
  3. ついには国家および資本主義経済にとって代わるべき社会主義連合は、志ある社会主義者が生活共同体を結成し、時々の可能性に応じて資本主義経済からの離脱を実行することによってのみ、実現の緒に就くことができる。
  4. 手始めとしての社会主義移住地は、消費の共同化と相互信用を貨幣経済に代えることによって準備される。この方法によって、働く人々及び経済共同体が、利得者や寄生者なしに生産し、その労働生産物を互いに交換する可能性が作り出される。
  5. 今日のいわゆる資本は社会主義連合体においては二様のものとなる。すなわち第一は諸制度を形成し、働く人々を保証する結合の精神であり、・・・第二は今も資本の一部であり、社会主義連合体においてもつねに経済の前提条件たるところの土地である。
  6. 土地の解放と、正義、真の必要及び時効のない土地所有権は存在しえないことの承認を原則とする経済共同体への土地の新たな分割とは、民族の間の社会主義の究極かつ完全な成就のための条件である。
  7. 土地所有関係に大きな変革が到来するためには、労働者はまず社会主義的資本であるところの共同精神の確立を基にして、時々彼らの数と精力に応じてできるだけ多くの社会主義的現実を形成し、その模範を示さなければならない。(本文から引用)

8. 社会主義を実現しつつ生活する社会主義者が存在しない限り、社会関係や所有関係の改革のいかなる見込みも存在しない。
9. 社会主義は決して国家政治の問題ではなく、また権力闘争や資本主義経済のために働く労働者階級の地位のための闘争の問題でもない。それは物質的関係の変革に限られるものではなく、今日ではまず第一に精神的運動である。
10. アナルヒーは、・・・社会主義の別名にすぎない。真の社会主義は国家および資本主義経済の反対者である。社会主義は自由及び自発的結合の精神からのみ生れることができ、個人とその共同体のうちのみ成立することができる。
11. 社会主義の精神が広がり、またそれが人間の真の本性から深く発する度合いが多ければ多いほど、人々は、抑圧、愚昧、貧困に導く一切の愚かな制度から一層力強く離反し、強権的権力に代わって協約が、国家に代わって自由な共同体および団体の連合すなわち社会が一層徹底的に出現する。
12. 社会主義連合大建設のさいには不可避免的に工業都市から地方のプロレタリアートの移住、農業、工業および手工業の結合、精神的労働と肉体的労働との合一が行われ、また強い勤労の喜びと共同社会的緊密感が生みだされ、これによってわれわれは共同体と民衆にまで高められる。 p.242 - 243